

D Q 8 オーブと罪び
との旅

ぽんぽんペイン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

暗黒神ラプソーンを倒すために勇者一行が集めていたオーブ。実は先回りしてあれを置いた者がいたという話です。

「勇者と寄り道の旅」とリンクしています。そのため、投稿は不定期になります。全部で14話を予定しています。PS版しかプレイしていないので、DS版とはいろいろ違うところがあると思いますがご了承ください。

目次

プロローグ	1
旅の始まり	10
パルミドで	18
マルチエロの頭痛	26
リーザスでもニアミス	36
とつても当たる占い	46
イシユマウリに会う	57
ギャリング邸	66
リブルアーチで	78
レオパルド、昔の主に会う	86
オークニスで	94
翼よどこに？	102

勇者に呼ばれる	109
夢で会えたら	117
最後のお使い	133
エピローグ・ゴルドの洞門	141

プロローグ

蠢く人々。

阿鼻叫喚は、永遠に続くかと思われたが、今はもう泣き叫ぶ声もなく。

身体の痛みを感じることもだけが、生ある証拠。

圧倒的な暗闇に、私たちは潰されている。

目を、閉じていても開いていても、見える景色は同じ。

朝か昼か、考えることすら煩わしい。

不思議な身体感覚。空腹を感じない。落ちたときのまま、時が止まったのだろうか。

少しずつ、この状況を認め始めた。

落ちたのだ。ゴルドの深淵に。巨大な女神像と共に。神殿の中にいた者たちは皆、ここにいる。

誰かを探す声がなくなつて、どれくらいの時間がたったのだろうか……。

* * * * *

一人の小柄な騎士団員が、自分の隣で小さくうめいている人に声をかけました。

「あの……どなたか存じませんが、お怪我はないですか？」

「……ああ？」

「大丈夫ですか？」

「わしは、サザンビークから来たんじや……新法皇のお顔を見に……どうなったんじや……何も見えん」

「私も見えません」

二人の会話がきつかけとなったのか、あちこちから話し声が起り始めました。

「おい！ お前」

「あつ！」

騎士団員は仲間に会えたようです。仲間の騎士団員は、とても身体が大きいようです。暗闇の中、がれきなどにぶつかりながら、どうにか小柄な騎士団員のほうへやってきました。

「無事だったか？」

「はい、多分……。一体、どうなったのですか？」

「わからん、何も見えん」

「ちよつ……どこさわってるんですか！」

「すまんすまん……暗くて……」

セクハラのような会話をしている場合ではありませんが、なにしろ真つ暗です。手探りで様子を探るしかありませんでした。

しばらくすると、なにやら風のような感覚。真つ暗な中、人びとはきよろきよろとしていましたが、突然、雲の上からかけられたような、くぐもった遠い声がしました。

「……聞いたような声じゃ。もしやマイエラの者かの？」

「まさか！ オデイロ院長様！」

「まちがいない、この声は……」

二人の騎士団員は暗黒の空間を見上げます。すると、ぼんやりした白いシルエツトがふわりふわりと二人の方へ近づいてきました。

「おお、おまえさんたちか。元氣そうじゃのう」

「院長様？ ご無事で……？」

「いや、わしは死んでおる」

白いシルエツトは、よく見ると、オデイロ院長でしたが、どうも生きた人間のようではありませんでした。

「何が起きたか、わしは見ていた。ゴールドに封印していた暗黒神ラプソーンが女神像崩壊とともによみがえったのじゃ」

「暗黒神？ 伝説の、ですか？」

「そうじゃ」

「ああ、あの黒い胎児のようなものが暗黒神……」

大柄な騎士団員は頭を抱えます。

オディオ院長は、くるりと360度回転し、生前のままの優しい声で言いました。

「皆さん、わしはオディオと言います。マイエラ修道院の院長をしておった。わしは正確に言うと、間違ひなく死んでおるのじゃが、なぜか、ここにおる。とりあえず女神の思召しということで、まずは集まってもらえんかの……ほれ、チンカラホイ！ つと」

オディオ院長が手を振ると、蜂蜜ミルク色のほわほわした丸い塊があちこちに浮かびました。

「ああ、明るい！」

「温かいぞー！」

オディオ院長の出した塊に人々は笑顔を浮かべました。

そして自然とオディオ院長の霊の前に集まります。

「院長様……私たちは生きていますのですか？」

若い女の声に、オディオ院長は優しく答えます。

「ふむ、わしの見たところ、死んではいけないようじゃ」

「死んではいけない？ では生きていますね？」

ああ、よかった、とあちこちで喜びの声があがりました。ところが。

「そうとも言えん。ここは、時が止まっておる。生きたまま、止まっているのじゃ」

あまりにファンタジーな展開に、辺りがぎわめきだちます。

「私は、空腹も眠気も感じません。ただ、痛みが……」

「あたしは痛くないが、すごく腹が減ってるよ。あの時のままでさ」

「そのようじゃな。痛い、と思ったまま落ちた者は痛みが抜けん。腹が減っていた者は腹が減り、居眠りしていた者はねむいじやろう」

「では、ここへ落ちる直前の感覚が持続していると……？」

「持続……時は止まっているのじゃから、持続とは言わんじやろうが、何と言うか、確定？　まあそこはよいか……」

「じいさん、よくねえよ。血が流れ続けて死んじまいそうだ」

商人のような男が、血溜まりの上に丸まって右側の肩と脇腹を押さえていました。

「それはいかん！　おぬしは重体じゃ。手当てしてあげなさい。他のかたもこの騎士団員に診てもらうがよい」

オデイロ院長がそう言うのと、小柄な騎士団員の回りが更に明るくなりました。この騎士団員は驚異的な回復術を使える医療のエキスパートでした。見る間に男の出血を止め、ベホマをかけてやります。それを見て、負傷した人々が列を作りました。

「……院長、俺たちは、ここから助かるんでしょうか」

大柄な騎士団員がオディオ院長に聞きます。

「……うむ、それじゃが……」

オディオ院長は騎士団員をそつと手招きました。

「……えっ？ 何ですって？ マルチエロも来ている？」

何ということでしょう。

(暗黒神の憑依のせいとはいえ) 法皇様を亡き者にしたあのマルチエロが。(操られていたとはいえ) 暗黒神を蘇らせた、あのマルチエロが。

このゴルドの底に来ている？

「院長様、ここににいる者たちの中には、マルチエロをよく思っていない者もおります。どうか、内密に……」

「わかっておる。大丈夫じゃ。あの子は別の部屋におる。『大罪の間』じゃ。今はわしの管理下にある」

『大罪の間』ですか……。そんな所が……。……会えませんか？

「ダメじゃ。だが、救いはあるのじゃ……。話せば長くなるんじやが……。手っ取り早く言えば、皆を助けるためにあの子は、暗黒神を倒さねばならない」

「はっ。」

「相変わらずお前さんはトボけておるのう。ちーとも変わっておらん……」

オデイロ院長は、小柄な騎士団員が人々の治療を終えるのを待ち、二人に話し始めました。

「……ゴールドが落ち、お前さんたちがここへ来たあとじゃ。地上で何日経ったか解らんが、マルチェロがゴールドの浜に打ち上げられた。わしは意識のないあの子を見ておろおろしてしまった。死人のわしにはどうすることもできないの。すると女神がわしに言った。『お前の愛し子か?』と。わしは『そうです』と答えた。『この者は私を信じぬ。故に、私もこの者を信じぬ』と女神は言った。女神はたいそう機嫌を悪くしておつての。このままではマルチェロはおろか、ゴールドに落ちたお前さんたちも永遠にここに閉じ込められてしまう。そう思ったわしは、女神に申し上げた。『この者は、暗黒神を倒す力があります。どうか助けてやって下さい。まずは女神よ、罪なきあの子羊たちを救いたまえ』と。しかし女神は『あの子羊たちは忠義である。しかし、あのを救えば、子羊たちはあの者に従い、私を信じなくなる』と言った。なんと、器の狭い神だと思つたが、ここはどうにかこつちのペースにもってこなければならん。わしは『いや、女神よ。あの者は貴女を信じぬわけではない。教会や坊主に祈りを任せておいて、女神の加護を賜ろうとするのを改めようとしているだけじゃ』と言った。女神は、しばらく考え、……実に、地上タイムにして5日以上考えておつたな。その間に勇者一行が宙に浮く暗黒神の

住みかを壊したのじゃが、暗黒神は間一髪逃げ出して、保護膜に入ったまま空中に浮いておる。巨大な黒い塊じゃ」

院長は、ぶわっくしょん！ と豪快にくしゃみをし、続けました。

「女神は『では、チャンスを与えます。暗黒神ラプソーンを倒しに行こうとしている者がいますね。あの者たちがいざれ必要となるものを預けます。ラプソーンの杖が殺めた、7人の賢者の没した地に、わが秘宝を置いてくることが出来たら、お前の願いを叶える』と言ったんじゃ。わしは内心ラッキーと思った。あのマルチエロのことじゃ。そんなこと、朝飯前じゃからな。しかし、女神も女神。条件をつけてきた。『更に試練を与えます。簡単に達成できぬよう……あの者の視力を預かります。夜、月の光の中でだけ、見えるようにしましょう。それでどうです？』と。わしは焦った。いくらあのマルチエロでも、目が見えなくては旅に出られない。そこでわしは言った。『女神、それでは暗黒神を倒すのが遅くなります。せめて、無能でよいから付き人を一人……そうじゃ、それと犬を一頭つけてくれぬか？』と」

「無能な付き人と犬？」

「そうじゃ。女神は言った。『盲目の騎士と無能な付き人と犬か。まあいいでしょう』と……。それでの、今は女神待ちじゃ」

「女神待ち？」

「そうじゃ。今、『大罪の間』でマルチエロと付き人と犬に説明をしておる」
オデイロ院長は楽しそうにくるくる回りました。

旅の始まり

「マルチエロの旦那あ、これからどうするんです?」

「黙れ」

「兄さん、夜まで待ちましょう。とりあえず、安全そうな草原に案内します」

「うむ」

「旦那あ……俺あ腹が減って腹が減って……」

「道化師! 我慢しろ! ガウツ!」

「いてっ! バカ犬め、何しやがる!」

「いい加減にしろドルマゲス! レオパルド、ほうっておけ!」

「アイサー」

二人と一匹のパーティーが、ゴールドから小舟を漕いで、大きな毒沼がある土地へ流れ着きました。

「兄さん、ここに……」

黒い大きな犬、レオパルドは、盲目の主マルチエロを柔らかそうな草の上に誘導しま

す。

「お前は優秀な盲導犬だな」

「何をおっしゃる……それより俺なんかを信じて下さってありがとうございます」

見えない目を空へ向け、マルチエロは傍らの犬の背を撫でました。レオパルドはうつとりしています。マルチエロとレオパルドは、すっかり主従関係が成り立っているようです。無能な付き人ドルマゲスは、その二人の側でだらしなく寝そべりました。

「旦那あ、俺あ腹が減って腹が減って……」

「貴様っ！ 同じことばかりうるさいぞ、ガウツ！」

レオパルドはドルマゲスを片足で踏みつけ、牙を剥きます。

「レオ、ほうっておけ。食料の調達はドルマゲスしかできないのだ。役には立つ」

「アイサー」

レオパルドは忌々しげに蹴りをお見舞いし、再びマルチエロの傍らに伏せました。

「む……どうした、レオ？ どこか痛むのか？」

マルチエロは、レオパルドの様子がおかしいことに気づきました。

「いえ……」

「おい、犬、足がいてえんだろ？ 旦那、こいつ左後ろ足の肉球をずっと舐めてますぜ」

「何だと……。レオ、ちゃんと言え。夜になったら……月が昇ったら治療してやる。お

前は私の目なのだ。大事にしてくれ」

「兄さん……。かたじけない」

杖のせいとは言え、暗黒神ラプソーンの封印をとき、ゴールドを崩壊させてしまったマルチエロ。ラプソーン討伐隊を陰でサポートし、女神の秘宝を届けるという特命を言い渡されたのです。

マルチエロは、月明かりの下でしか目が見えないという試練も加えられ、案内人に杖の力を我が物にしようとした愚かな道化師ドルマゲスと、習性によつて落ちた棒を拾っただけなのに杖に翻弄されてしまった犬レオパルドを伴に、その旅に出たのでした。

「俺あ疲れました。宿に泊まりてえ」

「犬を入れてくれる宿などない。それに、ゴールドもない。それに、ここがどこなのか皆目見当がつかん。ドルマゲス、お前は一体どこを目指して舟を漕いでいたのだ？」

「えー？ そんなのわかりませんよ……。潮の流れに乗って漕いでただけですから」

ドルマゲスの無責任な発言に、マルチエロは深いため息をつきました。

ゴールドを出てからずっとドルマゲスはこの調子で、足が痛いのが減ったの文句ばかり言っているのです。

「宿がだめなら、せめて飯だけでも……」

「兄さん、俺なら大丈夫です。町の外で待ってますから。とりあえず魔物でも倒して宿

代かせぎましょう」

「この犬！ いいこと言うな！」

「俺に触るなっ！ ガウツ！」

レオパルドは、気安く背を叩いてきたドルマゲスの右手を思い切り咬みました。

「痛てえー！ 何しやがる、バカ犬！」

「いい加減にしろ！ ……全く……なぜオデイロ院長のかたきと共に旅をしなければならぬのだ……院長様はこんな男に殺されたのか……」

「旦那あ……その節はすみませんでした。俺が妙な考え起こさなけりや……」

しゅんとするドルマゲスにレオパルドが言います。

「ドルマゲス、仕方ねえよ。あの杖は暗黒神。支配されたんだ……。俺だつてチエルスや婆さんを……」

「レオパルドお……でもよ、俺はあの力を利用してしようとしたんだ。暗黒神の杖なんて知らなかったけど、とてつもない力が手に入るかもつてよお……」

ドルマゲスは肩を小刻みに震わせ、必死で涙をこらえています。哀れをさそうその姿には、闇の遺跡で見せた荒々しい第二形態の面影はみじんもありません。同じ罪を犯してしまったマルチェロもレオパルドも、胸が痛くなりました。

「とにかく、私は月の光の中でしか魔物を倒せない。ゴールド稼ぎは……誰だっ！」

マルチェロが不意に辺りを警戒します。

「ひいつ、誰だよう……せつかく休んでるのに！」

「兄さん、魔物です」

すつくと立ち上がったレオパルドが少し離れたところを見て言いました。

「ななな……なんだってえ？」

ドルマゲスは情けない声を上げ、腰を抜かしてしまいました。

「兄さん、女が魔物に襲われています！」

やめろ！ 放せ！ という真に迫った声がマルチェロの耳にも入ってきました。

「レオ、行けるか？」

「もちろんです」

レオパルドは声のする方へ華麗に走って行きました。

「ただだ……旦那あ、レオパルドがいないと俺たち……」

「心配するな。じきに月が出る……」

マルチェロの言う通り、うつすらと白い月が姿を見せ始めました。マルチェロはカツと緑の目を見開き、レオパルドの助っ人に走ります。ドルマゲスも、一人取り残されてはたまらんと、必死でマルチェロを追いしました。

「はやぶさ切りっ！」

マルチェロは電光石火の勢いで、2体の魔物を倒しました。

襲われていたのは女で、ゆっくり立ちあがると、服の汚れをはたいて言いました。

「誰だか知らないが、助かったよ。恩に着る……あたしはゲルダって、しがない盗賊さ」
「何？ 盗賊……って、ちよつとあんた血がつ！ 俺あ血い駄目だ……」

ドルマゲスがふらつく横で、ゲルダが腕からだらだらと血を流していました。

「大丈夫だ、このくらい……」

気丈に答える女に、レオパルドも心配そうにしています。

「ホイミをかけてやろう」

マルチェロが手をかざすと、みるみる血が止まり、傷口もきれいに消えてしまいました。
た。

「ちよつと、何だい？ 兄さん、魔法使いかい？ ……いや、本当に助かったよ。……と

ところで、兄さんたちは旅の人かい？」

「そうだ」

「……この辺は物騒だ。良かったら今晩うちへ来な。すぐ近くなんだよ。馬小屋でよ
きや泊めてやるよ。干し草のベッドがある。見張りの者もいるし、安全だ」

そんなわけで、一行は女盗賊ゲルダの家に厄介になることになりました。

「へえ、勇者様を探しにねえ。そりゃあ難儀なこつた……」

ゲルダにこつてりした夕食を振る舞われ、マルチェロは事情を適当に語りました。

……自分は、宙に浮かぶ暗黒神の呪いのせいで目が見えなくなつた。暗黒神を倒そうとしてゐる勇者様に激励の言葉をかけたのだと。

「……勇者様つてのは4人組で、小僧とチビデブとチャラ男と小娘だつて？ 妙とか胡散臭いというか……頼りになりそうにない奴らだね……あたしじゃ申し訳ないけど、そいつらのことはわからない。まあ、今日はゆっくり休んで行きな」

二人と一匹は馬小屋でゆっくり夜を明かしました。

翌朝、ゲルダにこつてりした朝ご飯を振る舞われ、意外とこの旅はうまくいきそうだと少し思い始めたマルチェロ。ドルマゲスも朝からこつてり料理をおかわりし、嬉しそうです。さつさと朝ご飯を済ませたレオパルドは、外で見張りのマツチョと仲良くじやれあつていました。

「……ここから一番近い町はパルミドだ。北へどんどん上がっていけばいい。途中、教会があるから休めるよ。命を助けてもらったのに、あんまり力になれなくて悪かつたね」

「何の。一飯の恩、決して忘れはしませんまい」

「そうかい……そうだ、いい物やるよ……キメラの翼だ。珍しい物じゃないが、たくさんあるから……」

「それはかたじけな……っ！」

「ちよいと！ どうしたんだい？」

マルチエロは突然眉間を押さえました。

「ゲルダ殿、世話になった……」

マルチエロは差し出されたキメラの翼を震える手で受けとり、家を出た瞬間、高く投げました。

あつげにとられるゲルダの目に、会いたいんだか会いたくないんだか微妙な関係の男の姿が見えてきました。もちろんその後ろをいつもと同じメンツがぞろぞろ着いてきます。そういうえばヤツの旅の仲間、今しがた聞いた勇者一行と同じ構成だとゲルダは思いました。

パルミドで

マルチエロたちは、女盗賊ゲルダにもらったキメラのつばさを使って、パルミドにやってきました。

「パルミドは、賢者のいたところなんですか、旦那」

「そんなわけがなからう」

「ですよねー」

パルミドは世界中から有象無象が集まった町。誰もマルチエロ一行を気にする者はいません。

「ここから一番近いのは、マイエラ修道院だ。貴様が手をかけた……っ」

「クウン……（兄さん、今は堪えて下さい）」

女神の力で言葉を話せるレオパルドも、人前では普通の犬らしく振る舞います。

マルチエロはその背を撫でてやりました。

昼を過ぎ、暖かい陽がそそいでいます。目の見えないマルチエロでも、明るさだけは感じる事ができました。

「とりあえず、勇者一行に見つからないように、女神の秘宝を置いてこなければならな

い。更に、彼らが窮地に陥ったら、すぐに助けねばならない」

「クウン……（兄さん、見つからないようになって難しいですね。早く秘宝を置きましよう）」

「そうだ。……私は目が見えん。昼間、魔物に襲われたら厄介だ。だから移動は夜だ。月が出たらマイエラに行く。その前にドルマゲス、今あるゴールドを使い、食料と薬を買ってこい」

「……」

ドルマゲスの返事がありません。

「どうした、ドルマゲスはいないのか？」

「クウン……（兄さん、奴は居眠りしています。今、起こします）」

「いや、眠らせておけ。起こすとかえってうるさくてかなわない」

「ウオン……（ですね。俺が見張りますから、兄さんも少し寝てください）」

レオパルドはそう言いましたが、こんな治安の悪い町で居眠りなんぞこいたら、すぐに追い剥ぎに会ってしまいます。マルチェロは目が見えない代わりに、他の感覚を研ぎ澄ませました。

少し離れたところで、マルチェロたちの様子をうかがっている二人組がいました。

「……おい、あの坊さん、目が見えねえんだってよ。お布施をちよいと頂こうじゃねえ

か」

「待て待て……。坊さんからふんだくるなんて縁起でもねえ。死んだら地獄に行っちゃもうよ」

「……かまわねえよ。大体、偉い坊さんなんてみんな儲けてんだ。二ノなんていい例じゃねえか」

「そう言われりやそうだな。坊さんは貴族から取り上げ、貴族は地主から取り上げ、地主は店子から、店子は……」

「……やめろ、キリがねえ。それよりさつきと頂こうぜ。連れが居眠りしてる間によ」

「ああ、だが犬が……」

「……バカ。犬はエサで釣れ。ニワトリでも捕まえてきて気を散らすんだ」

どうやら物取りのようです。彼らがそんなチンケな計画をしているとも知らず、ドルマゲスはぐうぐうイビキをかき、マルチエロはじっとしています。レオパルドだけはしっかりと辺りを伺っていました。ガサガサとニワトリが暴れ出すと、ついそちらに気をとられてしまいました。

「今だっ！」

物取りの一人が、レオパルドをpushさえつけ、もう一人がマルチエロの背後からこん棒を振り上げました。

「ガウツガウツ！」

レオパルドは馬乗りになれ、身動きとれません。

しかし、さすがマルチェロ。背後の気配を瞬時に察し、素早くこん棒を避けたかと思うと、こん棒を持つその腕を掴み、豪快に背負い投げしました。

「痛えー！」

石造りの階段に思い切り落とされた物取りは、ヒイヒイ言いながら逃げて行きました。

レオパルドも、一瞬のスキを見逃さず、するりと抜け出すことに成功しました。

物取りは一目散に逃げ出します。

「レオ、どこだー！」

マルチェロは何かを探すように、両手を動かします。

物取りの逃げた方へ牙を剥いていたレオパルドは、すぐさまマルチェロの足元にすりよりました。

「クウン……（面目ない、俺が側にいながら、兄さんを危ない目に会わせてしまいました）」
「大丈夫だ。騎士団の訓練からすれば、あんなものは奇襲にもならん。それより、怪我はないか……！」

マルチェロが自分の身より犬の心配をしているのを見て、声をかけてきた人がいまし

た。

「あの、旅のお坊さま、お強いですね。私は酒場をやっています。一杯奢らせてください」

「いや、主人殿、陽の高いうちからは飲まんことにしている」

「それじゃあ、お布施がわりに昼食をお出ししましょう。魚のいいのが入っていますから。どうぞ遠慮なく」

「かたじけない。だが、私はこの犬と離れるわけにはいかんだ。食品のある場所へ犬を連れて行くほど、私は無遠慮ではないのでな」

「何をおっしゃいますか！ その犬、お坊さまの盲導犬でございませう？ このパルミドに盲導犬を拒否する店などありません。……まあ、犬の苦手な方もいらつしやいますから、お坊さまがよろしければ、秘密の部屋にお通しします。……いえね、ちよつと別の商売もしているものでね……」

酒場の主人に、さあさあと促され、酒場のカウンターの奥にある小部屋に通されました。

「……なんだ？ この客は」

小部屋には厳つい男がおり、じろりとマルチエロを値踏みしました。

「ああ、いいんだよ。あんたの客じゃない。それより、今月のシヨバ代もらつてないが

「？」

「……すまん、最近、例の上客が来なくてよ。紅蓮のローブを持ってきたら、大親分の楯と代えてやる約束なんだが」

「紅蓮のローブねえ。そりやまた珍しい……。まあいいさ。あんたも昼飯まだだろ？」

ちよつと待つてくれ。用意してくるから。このお坊さまに失礼のないように頼んだよ」

厳つい男——闇商人は、酒場の主人には頭が上がらないのでしょうか、黙つてテーブルの準備を始めました。

新鮮な魚の焼き物がついた昼食が進んでいくうち、闇商人も打ち解けてきて、酒場の主人が先ほどの顛末を面白おかしく話し終える頃には、すっかり仲間になつていました。

「……そうか。あいつら目障りだったからな。パルミドのルールつてもんを知らねえ。いい葉だろ。……それにしても、お坊さんよ、いい犬だなあ」

闇商人はレオパルドの背を撫でます。すると、酒場の主人が目を吊り上げて怒りました。

「おい！ 仕事中の盲導犬に気安く触っちゃ駄目だ」

「おつと、すまねえ。いや、さすがだと思つてよ。そわそわしたり食い物欲しがったりしねえんだな、盲導犬てのは」

「ええ。レオは私の目です。彼がいなくては旅はできない」

マルチェロがレオパルドに触れると、レオパルドはフーンツと鼻を鳴らしました。

「甘えてんな、こいつ！ でもいくらいい犬でも、旅は大変でしょう」

「あつ！」

「ど、どうしました？」

「連れが外にいます。忘れていました」

「ああ、あの居眠りの……。私がちよつと見てきました」

すっかり寛いでいたマルチェロは、ドルマゲスのことを忘れていました。

しばらく闇商人と商売について話していると、酒場の主人があわてふためいて戻ってきました。

「なんだなんだ、騒々しい奴だな。連れとやらはどうした？」

「お坊さま、大変です。お連れの芸人さんが……。ゆ、誘拐されました！」

「何だと？」

酒場の主人によると、先ほどこてんぱんにのされた物取りが、仲間を連れて仕返しにきたのだそうです。マルチェロとレオパルドの姿がないのでドルマゲスを誘拐し、次のような手紙を残していました。

『…………』の男を無事に返してほしくば、我々のアジトへ来い。日暮れまでに来ない場合

は、ぼろ雑巾にして放り出す』

「クウン……（どうします？　面倒なことになりましたね。俺的には、返してもらわなくてもいいんですが）」

「あの男を連れていくことは、女神の思し召しなのだ。見捨てることは、女神に逆らうことになる」

「お坊さん、俺にも加勢させてくれ。アジトなら、湯気のたつあそこだ」

闇商人は力強く立ち上がりました。マルチエロも、かたじけない、と言って右手を差し出そうとした時です。マルチエロの眉間に痛みが走りました。

「いかん……」

「お坊さん、どうした？」

「あ……いや、お気持ちはありがたく頂戴いたす……あとは我々で」

マルチエロとレオパルドはあわてて闇商人の家から飛び出しました。

と、同時に、酒場から声がかかります。

「おーい、紅蓮のローブを持って来たぜ？」

上客のお出ましでした。

マルチエロの頭痛

ちよつとした隙に、ドルマゲスが誘拐されてしまいました。

パルミドの住人は、何を基準に物事を行っているのか、騎士団時代からよくわからなかったマルチエロ。何度か訪れたことのあるこの地の、だいたいの地図は頭に入っていました。

「女神のお使い」の旅には、ドルマゲスがどうしても必要というわけではありませんでしたが、女神の命令にはドルマゲスを付き人として同行させることも含まれていました。仕方がないのでドルマゲスを探さねばなりません。

それよりも、旅に出てから二度目の頭痛に襲われたマルチエロを、レオパルドが心配しています。

「クウン……（兄さん、また頭痛ですか？ 一体なぜ）」

「ああ……あいつらだ。……勇者一行が近づくと、頭が痛くなることになっている」

「ワウオン？（何ですって）」

「女神の思し召しだ」

「ガウウ！（そんな、ひどい）」

レオパルドは、女神に向かって牙を剥きました。

「大丈夫だ、レオ。離れれば問題ない。……それより、湯気の上がついている井戸を見つけ
てくれ」

大きな犬を連れて歩く盲目の僧侶。かなり目立つはずですが、パルミドでは誰も気に
しません。

「ウオン……（兄さん、ありました。ついでにゴロツキも3人います）」

早速その井戸を見つけたレオパルド。さすがです。

井戸は湯気が上がっている以外、特に怪しいところはなさそうですが、ゴロツキが見
張っているところが相当怪しいです。そのゴロツキが、マルチェロたちに気づき、二人
のほうへやって来ました。

「よお、坊さん。待ってたぜ。縄ばしごで降りな」

ゴロツキの一人がマルチェロに縄ばしごを持たせます。促されるまま、縄ばしごに捕
まるマルチェロ。

「レオ、ここで待っている。……片付けておけ」

マルチェロは、器用に縄ばしごを降りていききました。「片付けておけ」と言われたレオ
パルドは、あつという間にゴロツキを退治し、町の外へ放り出しておきました。

さて、井戸の底。

「うちの者が世話になったようだな」

熱気ムンムンの井戸の底では、ゴロツキの親玉らしい男がふんぞりかえつていました。

「(ちん)そで」

そんな返事をするマルチエロのしれっとした態度に、親玉は少しムツとしたようでした。もちろん、マルチエロにはそんな様子は伝わりません。

「話はわかつているだろう？」

「あいにく、ゴールドはそれほどない」

「とりあえず全部出せ。そうすれば命だけは助けてやる」

筋書き通りの早い展開に、親玉は満足そうです。

「……わずかなゴールドでも欲しいのか。哀れなことよ」

「何だと？」

ここで断られるのはお約束ですが、マルチエロに「哀れ」と言われ、親玉はトサカにきちやいました。傍らのバカでかいナタを掴み、立ち上がります。

気配を察したマルチエロでしたが、直も無関心に口を開きます。

「……旅の途中だ。先を急いでいる。お前たちの思い通りにはゆかぬぞ」
マルチェロは腰のレイピアに手を掛けることもせず、殺気さえ消して身構えたりもしません。

ケンカを売った相手がそのような態度をとるのを見たことがない親玉は、逆に、どうやっつけたらよいかわからず、ナタを持つ手に力をこめるだけです。

一応、間合いを詰めてみる親玉。でもマルチェロは微動だにしません。
目が見えなくても、勝てる自信のあるマルチェロ。無我の境地に入っています。

「……もう一度言う、命だけは助けてやる、おとなしくあるだけのゴールドを出せ」
攻撃の糸口が見えない親玉。仕方なくもう一度同じことを言いました。

「もう一度言おう、旅の途中だ。お前たちの思い通りには……っ！」

マルチェロが急に頭を押さえました。

マルチェロをやっつける絶好のチャンスだと言うのに、親玉はあつけにとられ、立ちすくみました。

「な、縄……縄ばしごはどこだっ！」

マルチェロは片方の手を差し出し、必死で縄ばしごを探ります。

「おい待て、逃がさんぞ！」

「ゴールドもその男もくれてやる！ だから、なっ縄ばしごはどこだ！」

予想外の展開に、ゴロツキたちはおろおろするばかり。

「誰か降りてくるぞ！」

手下の一人が縄ばしごの上に人影を見つけました。

「何？ 見張りはどうした？ 誰も入れるなど言っただけだ！」

どこかで聞いたようなセリフを吐く親玉。ところが手下のゴロツキどもは右往左往するだけで役に立ちません。マルチエロは、とうとう頭を抱え、熱気ムンムンの方向に走り出しました。

「おいっ！ そっちは今日は休業だ！」

「久しぶりだぜ……っ？ なんだ？」

「どうした、トゲトゲ。おとりこみ中か？」

「えー？ 今日お休み？ セっかく楽しみにしてたのになあ、サウナ」

突然の来客に地下のゴロツキどもは真っ青になりました。

「あつ、あのときの……」

指を指された一人のゴロツキが、声の方、赤いバンダナの青年を見て震え上がります。

「どうした、リーダー？ あのとき？」

「……ほらクール、ずいぶん前だけど、パルミドに来たときさ、チンピラみたいのやつ

つけたじゃない？ あの人だよ。あ、あっちにも……ねえおじさんたち、真面目になったの？ 悪いことしてるとゲルダさんに言いつけちゃうよ？」

ゲルダの名前が出ると、親玉も思わずナタを落としました。ガチャガチャと派手な音が井戸内に響きます。

「あやつ、兄さんたち、ゲルダ姐さんの……お……知り、おしり……」

「何？ ゲルダの尻がどうしたって？」

すかさずもう一人がツツコミを入れます。そしてゲルダから借りている怒りの鉄球を取り出しました。

「ヤン、落ち着いて。お尻の話じゃないよ。この人たち、ゲルダさんの知り合いなんだって」

ゴロツキたちは既に全員土下座して許しを請うています。

「すいません、すいません、もうしません」

「なんだかわからねえが、ゲルダの舎弟なのか？ だったら真面目に仕事しろ。素人さんを巻き込んだじゃなんねえ」

「はい、すみません。……あの、どうぞ、サウナ入ってって下さいませ……さあさあ、お代はいりませんから……」

「そんなあ、悪いよ。ちゃんと払わせて。僕たちだつて真面目に仕事してるんだから」

勇者ご一行様が受付を済ませている間、ドルマゲスは解放され、頭を抱えるマルチェロにも縄ばしごが渡されました。

さあ、ようやく井戸の上。

「ウォーン！（兄さん、ご無事で！）」

「レオ、待たせたな。一刻も早くここを出るぞ。……仕方がない、ドニへ行くのだ」

マルチェロ一行は、勇者から逃げるように、足早にドニを目指しました。

ドニで食料と薬を買い、マイエラ修道院へ向かいます。もうくたくたでした。すでに夕日が沈みかけています。

女神の力で、身元がわからない魔法がかかっているとはいえ、ドルマゲスと共にマイエラ修道院に赴くのは、マルチェロにとって大層つらいことでした。

ところが……。

「旅の方あ？ どーぞどーぞ、好きな部屋に泊まってつてくらさい」

「我がマルチェロ様がほうおうさまにおなりになったんれすよ！ 今はちよつと行方不明だけどね。いやあ、めでたい！」

騎士団全員、お祭り騒ぎをしていました。

「なんとという体たらく！ それでも聖堂騎士団員か？」

「まあまあ、いいじゃないっすか。院長の館も開いてますから、是非見学してつてくらさいー」

そこら中にゴロゴロ寝そべる団員たち。下品な笑い、下手すぎる歌、散らかり放題の礼拝堂……。

「クウン……（兄さん、ここが兄さんの心のふるさと、マイエラですか？）」

「……言うな！」

「旦那あ……俺が言うのもナンですけど、あの日の面影もあつたもんじゃありませんね」
「……全く……貴様にだけは言われたくなかった……だが、事実だ……」

失意のマルチェロを嘲笑うかのように、中庭では盛大な宴が行われていました。

あの噴水前で人生を語り……壇上で団員を叱咤激励し……整然と並んでレイピアの訓練をした……この中庭が……。

「なんということだ……」

「兄さん、全て終わったら、一度お帰りになったほうがいいのではないですか……？ 犬の俺が言うのもナンですが、これはひどい……」

レオパルドが遠慮なく人の言葉を喋っても誰も気づかないほど、騎士団員は皆酔っ払っていました。

「……とにかく、今は、女神のお使いを……」

「旦那あ、すみません、本当に……俺がオデイロ院長を殺したばかりに、旦那のふるさとまでこんなにしちまった……」

「言うな、ドルマゲス。騎士団の体たらくは私に責任がある……」

この時ばかりは、足元のおぼつかないマルチエロをドルマゲスが支えます。

雑に直した短い橋を渡り、院長の館へ入るマルチエロ一行。上り慣れていたはずの階段を、ドルマゲスに手を引かれながら、一段一段踏みしめます。

「ううっ……、すみません、すみません」

階段を上りきると、ドルマゲスは「すみません」とくり返しながらぶるぶる震えました。

視力の失われたマルチエロの翡翠の瞳からもはらはらと涙が流れます。その足元で涙と鼻水だらけのドルマゲスが女神の秘宝をそつと置きました。

「クウン……（兄さん、場所を変えましょう。そろそろ月の出です）」

マイエラ修道院を出たマルチエロは東の方角に月を探しました。薄い光を投げ掛ける月。

今のマルチエロにはそれでも十分な明るさでした。

「よし、ゴールドを稼ぎながら移動だ」

マルチエロ一行は、次なる目的地、リーザスに向かいました。

リーザスでもニアミス

「なんだこっちは……」

「へえ、簡単には昇れねえようになってるんです」

リーザス村から東にある高い塔。守護神リーザスを奉るこの塔は、魔物が多数棲みつき、村の者も一年に一度の祭りの時しか参拝できません。

「貴様、誰を殺めたのだ？」

ドルマゲスが道案内をするのですが、さつきから同じ場所を行ったり来たりしてちつとも進みません。とりあえず塔の渡り廊下で策を練ることに。二人と一匹がかたまって腰を下ろしたところで、マルチエロがドルマゲスにそう尋ねました。

「……サーベルトっていうう、いい……あいやつ……若い男です。リーザスの大地主の息子で……勇敢で……」

ドルマゲスは、指をもじもじさせながら白状します。

「おい、ドルマゲス、顔が赤いぞ。変態か？」

「うっ、うるせえ！ 犬に何がわかる？」

この二人……いえ、一人と一匹は、寄ると触るとすぐにケンカです。レオパルドに敵

うはずなどないのに、ドルマゲスは無駄に虚勢を張るのです。

「まあいい。……して、なぜ貴様はその時この塔を昇れたのだ？　女神は塔の頂上へ行けと言った。貴様がサーベルトを殺した場所だろう？」

「へえ、旦那……。あん時杖の力が作用して、すすい宙を飛んだもんですから……。その、道順は……」

「……全く、役に立たねえな」

「なにっ？　ならお前が行けよ、犬！」

見下ろしてくるドルマゲスに、レオパルドはウウーと威嚇します。

「よさないか！　レオ、落ち着いて私の側にいろ！」

「すみません、兄さん。ドルマゲスのヤツがあんまり無能なのでつい……」

「わかつている。だが、ここでドルマゲスの無能さを語り尽くしたところであかかない。私の目が見えればよいのだが、月明かりの入らない塔の中では私とて無能に近い。……仕方がない、今日はここで一夜を明かすぞ。明日出直した。朝になったらリザスに戻り、サーベルトの実家に行く」

サーベルトの実家と聞いて、ドルマゲスが青くなりました。

「ええっ？　サーベルトの実家に……？　駄目駄目駄目。駄目ですよ……旦那あ。

俺あ、どの面さげでご遺族のかたに会ったらいいか」

ここへきて殊勝なドルマゲス。サーベルトを殺したことを心から反省しているようですね。

レオパルドは、ドルマゲスに向けていた牙を引っ返して言いました。

「ドルマゲス、勇者の中に女がいたろう？ あれがサーベルトの妹だ。俺たちは死んでるんだ。お前は家族に敵討ちされたんだから大丈夫だ」

ちよつと論旨がずれているようですが、レオパルドが珍しく励ましました。

そんな様子に、マルチェロはふつと笑みをこぼします。

「私に任せておけ。今日はもう休むぞ」

翌朝、一行はリーザス村に入りました。

「……………どなたですの?」

田舎の代表のようなリーザス村、最奥にサーベルトの実家がありました。

使用人に取り次いでもらい、マルチェロ一行は、未亡人のアルバート夫人に目通りがないいます。

「アルバート家ご当主様でございますね。私はマルチェロと申しまして、旅の僧です。この度、暗黒の神を名乗る魔物が現れたというが、ご存じか?」

「ええ。知っておりますとも。ゴールドが落ち、暗黒の神が女神の内部から現れたと……」

ですが、それが何か？」

アルバート夫人は、目の見えない旅の僧と、むやみに細長い顔をした付き人を交互にみやりました。

「勇者が現れ、暗黒の神を倒すと女神はおっしゃった。拙僧も微力ながら、その手伝いがしたいのです」

「まあ、それは殊勝なことでございますのね……ですが、それが何か？」

アルバート夫人の、さつきからびくりともしない表情に、ドルマゲスがおびえていません。目の見えないマルチエロには、夫人の警戒心モロ出しの様子はさっぱり伝わっていませんが。

「実は、こちらのサーベルト殿は大変な剣の腕前であると、遠い砂漠の果てまで噂が聞こえておりました。私は、名の知れぬ勇者などより、サーベルト殿こそ暗黒の神を倒すにふさわしいと……」

マルチエロは、サーベルトがまるでまだ生きているかのように、美辞麗句を並べ、その栄誉を称えます。

アルバート夫人は、顔色を青くしたものの、やはり微動だにせず、マルチエロを真っ直ぐ見つめながら話を聞いていました。

マルチエロの隣では、いつ夫人が泣き崩れるだろうとハラハラしながら、ドルマゲス

が細長い顔をなるべく小さくして様子を伺っています。ドルマゲスのそんな心配をよそに、夫人は気丈に振る舞っていました。

マルチエロは尚もぺらぺらとサーベルトを誉め称える言葉を紡ぎ、村人の話まで引き合いに出して喋り続けます。

——やべえ、マルの旦那あ、やべえよ、だつてだつてだつて、怒ってるよ？ このオバサン！

マルチエロとアルバート夫人の顔を交互にちらちらと眺めるドルマゲス。マルチエロのお世辞が続くにつれ、アルバート夫人の青白かった顔が、アツプにした髪と同じくらい赤く赤くなってきました。同時に、メラメラとした火の熱さが夫人の手の辺りから放出され、その熱が頂点に達し、夫人の上品な口が「メ」の形に開きかけた正にその時！

「……しかし、私たちは失ってしまった……」

マルチエロは、声のトーンを5度ほど下げ、静かに言いました。

アルバート夫人の手の中では、炎になりそこねた火の粉がぱちんぱちんとはじけ、控えめな煙となり消えてしまいました。

「どうか、サーベルト殿の永眠の地で祈りを捧げることをお許し頂きたい。彼の勇氣に恥じぬようと、旅立たれたご令嬢のためにも……」

「ゼ……ゼシカを……存知なのですか？」

娘のことを言われ、会ってから初めて、夫人は母の顔になりました。そして柔らかく目を閉じました。

再び開いたその目には、もう警戒の色はありませんでした。

マルチエロはその気配を察し、より穏やかな口調に変えて、ゆっくりと続けます。

「……はい。女神の告げた勇者の中に、古の魔法戦士の力を受け継いだ勇者がおり、その者はリーザスにいるとわかりました。私はすぐにサーベルト殿のことを思い出した。しかしサーベルト殿は……。……ご令嬢がどのようなかたかは存じ上げません。私はこの通り目が見えませんので。……ただ、この村へ来て確信しました。リーザスを守る魔法戦士とはゼシカ嬢なのだ。私が旅の途中で聞いてきた勇者の中の女性と、見事に合致します」

まったく、口八丁手八丁とは、マルチエロのことを言うのでしょうか。なおも適當なことを次から次へと喋りまくり、アルバート夫人の信頼を得て、とうとう夫人にリーザスタへ同行すると言わしめたのです。

「まあまあ、私ったら、お茶もお出ししないで……」

「お氣遣いなく……」

すっかり打ち解けたアルバート夫人。マルチエロも、言葉では一応お断りしました

が、品の良い夫人と一緒に旧家のお茶を是非とも味わいたいと思いました。何せ、ゴルドの底から放り出されてからというもの、「品」とは全く無縁な日々。ろくなものにもありついていません。……ここで上質のお茶にありつけるなど……。マルチエロはああ見えていいとこの坊っちゃん育ちですから、セレブな雰囲気は得意です。

「うっ……！」

「だっ、旦那！ 大丈夫ですか！」

なんとということでしょう！ 客間に通されたところでマルチエロの頭痛が始まってしまいました。

「まあ、お坊様、いかがされましたか？」

その時。

「奥様！ ゼシカお嬢様が戻られました！ 今、村中が大騒ぎです」

予想通り、マルチエロの頭痛の原因、勇者ご一行様が到着されました。

「まあ、ゼシカが？ 皆さんもご一緒なのね」

アルバート夫人はいそいそとティーカップを増やします。

「お坊様、ゼシカに会って話をして下さいませ。きつと励みに……」

「いや、奥方殿……。それはできない。女神の命により、一刻も早く、リーザ斯塔に……」
マルチエロのピカピカの額にキラキラと汗が流れます。

「旦那……。ひとまず出ましよう。奥さま、さあ、塔へ……」

「でもゼシカが……」

そんな問答をする間も、マルチエロの頭痛はどんどん激しくなります。

——時間がないっ！

「お……奥方殿……ち……地図はござらんか……？　我々だけでなんとか詣でます……」

アルバート夫人は、おろおろしながら地図を探し出し、差し上げます、と言ってマルチエロに渡しました。

マルチエロたちは逃げるようにアルバート家を出て、宿屋の裏手に隠れました。

「久しぶりだわ〜」

「またあの甘い菓子にありつけるなあ」

「ヤンは食いしん坊だね。でも……僕もお土産に少し欲しいな」

「つたく、お前らお子さまだなあ」

マルチエロの頭痛の原因である勇者様ご一行が、のんきにやって来ました。

危ないところでした。女神の決めたルールでは、もし勇者様ご一行に会ってしまったら、お使いは中止になるのです。そうなれば、マルチエロは生涯ゴルドの底から出られ

ません。彼らがアルバート家に入ると、マルチエロの頭痛もすつと治まりました。ようやく出発できます。

妙な疲れを感じながら、勇者サポート隊は再びリーザス塔の前にやってきました。

リーザス塔の地図は複雑で、方向音痴なドルマゲスでは全然わかりません。仕方なく、月が出るのを待ち、マルチエロが地図を把握して塔に昇ることになりました。マルチエロはそれはそれは頭のいい人ですから、完璧に地図を把握し、すいすいと頂上まで上ることができました。

「美しい像だ」

塔の最上層、月明かりの中でリーザス像が白く光っています。

ドルマゲスは激しく混乱し、泣きながらリーザス像に許しを乞うていました。

マルチエロはアルバート夫人に宣言した通り見ず知らずのサーベルトのために祈りを捧げます。

「……これで、2つ済みましたね、兄さん」

「そうだな」

「うっ……ごめんなさいごめんなさい……えっえっ……ごめんなさい……ひつく……
ひつく……」

無言で歩を進めるマルチエロ。泣き続けるドルマゲスを無視し、時おり現れる魔物を
レオパルドと共に軽く捻ります。

次の目的地、トラペッタにつくまでこんな調子でした。

とつても当たる占い

「ここが現場か」

トラペツタに到着した勇者サポート隊のマルチエロ、ドルマゲス、レオパルド。

教会で一夜を明かし、朝飯前のゴールド稼ぎを終え、彼ら二人と一匹は、焼け尽くしたマスターライラスの家の前でお祈りをしていました。

特筆すべきことのないこの町。次の目的地は遠いので、さっさと用事を済ませたいマルチエロです。

女神の秘宝を置き、立ち去ろうとしたとき。

「あの……すみません」

見ると、年の頃18。長い髪を二つに結った少女が立っていました。腕にはなぜか、いかにもおっさんが好みそうな酒の瓶。

「お嬢ちゃん？ 俺たちに用かい？」

師匠のマスターライラスを殺害した現場で涙や鼻水をだらだら流していたドルマゲスが言いました。

「えっ……あの、この火事のおうちの……ライラス先生の知り合いですか？」

細長い上、気味の悪いメイクのドルマガスに見つめられ、少女は半歩下がります。「そうだが、それが何か」

マルチエロも、声のする方へ体を向けました。少女はマルチエロの厳しい物言いに身体をすくめまします。相変わらず威圧的なマルチエロですね。

「あつあの、私はユリマと言います……父が占い師でして、『ライラス先生のところに女神の使いが来る』と数日前から言っていたものですから……ここで祈りを捧げてらしたから、あなたの方がその女神の使いなのかと……でっ……でも、すみません。違いますよねっ」

酒瓶を抱えた少女……ユリマは今度は3歩ほど下がります。

「……そうだ、と言ったら信じるのか？」

ユリマが黙っているの、マルチエロは続けました。

「もし、そうだとしても、そうでないとしても、娘、あなたには関係なからう。それとも、そなたの父の占いが当たるか当たらぬかで賭けが行われているとでも？」

「いえ、賭けなんて……。父の占いは外れることはありません」

小声ながらもきつぱりといい放つユリマに、マルチエロは少しだけムツとしました。

「では何故、我らに声をかけたのか？ からかいか？」

マルチエロの詰問に、ユリマはもうびくびくして言葉が出ません。

「ウォン……（兄さん、娘がおびえています。もう少し優しく喋って下さい）」

「わかった。……では言おう。暗黒の神がよみがえったのは知っているな。それを倒すべく立ちあがった勇者がいる。私たちは、暗黒の力の前に倒れた7人の賢者の魂を慰める旅をしている。勇者に力をお与えくださいと祈っているのだ。マスターライラスで3人目だ」

抑揚のまつたくない、まるで渡されたばかりの書面をそのまま読んだようなマルチエロでしたが、それを聞いたユリマの顔がぱつと輝きました。

「ああ、あなた方こそが女神の使い！　どうか、父に会って下さい！」

ユリマは駆け寄り、マルチエロの手をそつと取ります。

マルチエロは、予想外の出来事にびっくりしてしまいました。

——しまった、油断した！

誰かにこんなにやすやすと手を取られることなど、物心ついた時からありませんでした。普段から殺気を放っているマルチエロにしては、無防備であったかもしれません。背後から、弟に抱きつかれた時より驚いてしまいました。

大抵の人は、恐ろしくてマルチエロになど近寄れません。もちろん、マルチエロのほうから誰かの手に触れたいなどと思ったこともありませんでした。

それなのに、今は、人の手がこんなにも温かく、優しく、頼れるものと感じます。レ

オパルドを頼りにしているように、この娘を頼ることが許される気がしました。

——目が見えないということで、誰かに助けられている……。

マルチエロの肩の力がちよつぴり抜けたようです。

「お父さん！　女神さまの本当のお使いのかたですよ！」

マルチエロ一行は、トラペッタの奥まった所にある小さな家に案内されました。

「ユリマが家に連れてくるとはな。ならば、本当なのだろう」

いきなり慇懃無礼な言い方をされ、マルチエロだけでなく、ドルマゲスもムツとします。

「お父さんたら、そんな言い方……」

「ふん……まず占つてやろう……」

占い師の上からの物言いに耐えられないマルチエロが、ドルマゲスに「行くぞ」と言いました。

「えつ、旦那、話するんじゃないんですかい？」

長い顔をさらに伸ばしてドルマゲスが尋ねます。

「お坊さま……お待ち下さい……」

ユリマもおろおろしています。

「……せっかく占ってやろうと言うのに……」

そのまま立ち去ろうとしていたマルチェロでしたが、この上から目線な言葉に、キツと、占い師の方に細い顎を向けて言ったのはこうです。

「せっかく、ですと？ あいにく、私は占ってもらいたいわけではないのでね。急ぐ旅です。こうしている間にも、宙に浮く巨大な暗黒の神が力をためている。ここで油を売っている暇などない。……ユリマ嬢、世話になった。私は、見ず知らずの人に誘導してもらったことはなかった。そなたは優しく、信頼のおける人間だ。……達者で」

あらあら、マルチェロったら、優しくしてもらったことがよっぽど嬉しかったのでしょうね。そんなことを言うと、ドルマゲスの手を振り払い、自力でドアを目指します。

「待たれよ！」

占い師が引き留めます。文字通り、マルチェロの腕を掴んで。

「用事はないはずだ」

「申し訳なかった。私はルイネロ。女神の使いが来ると占ったら、冷やかし、からかい、成りすまし、便乗占いなんかが増えてな。しゃべらなければよかったのだが。ただ、私は公言しなかったことがある。……その使いは、頭がいいがプライドが高く、力があるが目が見えず、仕事ができるが付き人に恵まれず、すべきことはわかっているが何を信ずるべきか迷っているのだと。間違いない、あんたがその使いだ。そして、私にはわか

る……目が見えないのは女神のせいだろう」

占い師ルイネロは、ずばり言い当て、更に続けます。

「ユリマに、ライラスの家の前に来る怪しいやつらに声を掛けさせた。ニセ者なら、酒場に誘い、待機させた警備隊に引き渡す手筈になつている。だが、ユリマはあんたたちをうちへ連れてきた。本物と判断できる」

「何故、ユリマ嬢は見抜けるのだ？」

マルチエロに問われ、事の成り行きを不安そうに見ていたユリマがしつかりした口調で言いました。

「はい。私の占いでは『女神のお膝元より2つの魂が、女神と人間世界の狭間より迷える1つの魂がやって来る。迷える魂は盲い、心渴いている。彼らの、世の力となるために為されることは、3つの魂を救う』というものでした」

「ユリマ、なんだそのカッコいい占いは！ 私には『お使いのうち、一人は目が不自由』しか言わなかつたぞ？」

娘に負けたような気がしたルイネロは、ちよつと食つて掛かつてしまいました。

「えっ？ そうだっけ……。ごめんさい。でも、私の占いは抽象的な感じだから……私には理解できないんです」

「いや、ユリマ嬢、盲目の私は今は迷いはないが、いずれ近いうちに迷うことになるだろ

う。そして、確かに心渴いている。ユリマ嬢……純粋な人の優しさに久方ぶりに触れた」

なんだか口説いてるみたいに聞こえますね。ルイネロも気が気じゃありません。マルチエロはそんなつもりはまーったくないんですけどね。

「まあ、そう言うわけだ。一杯やってくれ。私もあんなたちを応援したい」

そんなこんなで、すっかり打ち解けた一同。ルイネロと一杯ひっかけることになりました。おつまみの用意ができるまでルイネロに占ってもらいます。

「むむっ！ むむむむむっ！」

ルイネロが念を送ると、水晶の中がもやもやしました。そのあとふわふわし、ぐるぐるしてボワツとなつて、占いが終わりです。

「……ふう、わかりました。危機が迫っています」

「危険はもとより承知」

「……無事に次の目的地につきたくば……、早く出ていけ？」

「なんだそりゃ？ ルイネロさんよお、大丈夫なのかい？ お嬢ちゃん、あんたも占ってくれないか？」

ドルマゲスもたまにはいいこと言います。

「では……」

ユリマも同じ水晶で占います。

水晶は、もわもわと白くなり、キラキラと赤と銀の星屑が舞い、緑色の丸い風船がケタケタと笑うように踊りました。

「へえ〜聖誕祭の飾りみてえだな……」

ドルマゲスが感心します。

「ああっ！ 大変です！ 『人でもなく魔物でもない遥かな異郷に生まれし者と、近き血の持ち主が……』」

「ううっ！」

「マルの旦那あー！」

マルチェロは突然頭を抱えてしやがみこみました。

「ここにはなりません！ 早く……」

ユリマに追いたてられ、ルイネロ家を出たマルチェロ一行は、家の前の井戸に飛び込みました。いえ、飛びこまされました。

「痛えよ！ お嬢ちゃーん、俺たちはどうすればいいんだ！」

井戸の底でドルマゲスが叫びます。

「すみません、あなたがたの危機がこつちに来るみたいです。あと5分したら大丈夫。そしたら井戸から出て、次の目的地にお出かけ下さい！」

大人の男二人と、大型犬一頭を井戸の中へ押し込んだユリマは、井戸の中に向かってそう叫ぶと、迫りくる危機が何なのか、あたりを警戒します。

すると、懐かしい人がやってくるではありませんか。

「ユリマちゃん、久しぶりだね、元氣だった？ ルイネロさんいるかな？」

「エイトさん、それからヤンガスさんと……」

「うん、仲間のゼシカとククールだよ。ごめんね、急に来ちゃって。ククールがユリマちゃんに占ってもらいたいって言うから……」

5分後、勇者様ご一行がルイネロ家に入ったところでマルチエロの頭痛が治まりました。

井戸の底では。

「兄さん、大丈夫ですか？」

「レオか。大丈夫だ。早くこの村を出るぞ」

「でも、レオパルドはどうやってここから出すんです？」

「！」

この井戸には一本のロープが下がっているだけです。人間はロープを登ればすむことですが、犬はそうは行きません。彼らは瞬間移動の呪具や、脱出の呪具も持っていま

せん。

「女神の思し召しでどうかならないものか……」

マルチェロはしばし頭を抱えました。ドルマゲスも上を見ながら一生懸命考えます。

「マルチェロの旦那、馬飛びの要領でやってみます？ 俺が馬になりますから、旦那は俺の上に馬になり、壁に手をつきます。レオパルドは助走をつけて、俺たち二人の上を駆け上がっていくんだ」

「いや、だいぶ高さがあるぞ、ドルマゲス」

レオパルドがいくら大型犬とはいえ、ちよつと高さがあり過ぎます。

それでも、何もしないよりはましだということで何度か試みましたが、案の定、レオパルドの前足が井戸のふちにかかることはありませんでした。

「……レオが足を痛めても困る」

「兄さん……」

「しようがねえな……」

「私が背負おう」

「……そんな……」

レオパルドは、まるで子犬のようにキュンとします。

「……いや、旦那、俺がやります！」

「なんだって?」

嫌がるレオパルド。

「これ以上、旦那に迷惑かけられない。……こんな強くて男前の人がいたなんて。俺あ、暗黒神の杖を持つ前に、旦那と知り合いたかった……聖堂騎士団に入りたかったよう……」

そんなこと言われても困ります。

でも、その気持ちにくみとつたレオパルドは、黙ってドルマゲスの肩に手を掛けました。ドルマゲスは両手でしっかりと後ろ脚とお尻を支えます。

その様子を温かい気持ちで感じていたマルチエロでしたが、ドルマゲスの腕力がなさ過ぎて片手でロープをつかむことができず、登ることができません。結局マルチエロがレオパルドを背負い、器用に登って行きました。

無事に井戸から脱出したマルチエロ一行は、トラペツタを出て、今度は西へ向かいます。

イシユマウリに会う

「賢者はこんなところにいませんよねえ、マルの旦那あ？」

トラペツタで女神のお使いを済ませたマルチエロ一行。夜になるのを待つて向かったのはトラペツタから西でした。この先は呪われたトロデーン城くらいしかありません。

「……兄さん、西の大陸に渡り、ベルガラツク、リブルアーチ、オークニスへ行くんですよ」

「そうだ」

マルチエロは、さも当然という顔をしてどんどん西へ向かいます。

「旦那あ、西の大陸にはなんとかの翼で行ったらいじやないですか。トラペツタへ戻って、俺が買ってきますよ」

ドルマゲスが言うのももつとものです。西の大陸へ行く定期船はもともと便が少なかったのですが、暗黒神復活のせいではほとんど運休状態でした。もちろん、このトロデーン城下は何もかもが機能していません。

ゴールドのかかる個人の船に乗せてもらうほどの持ち合わせもありませんし、知り合

いもいません。

そうなると、カメラの翼で行くのが最も簡単なのですが……。

「兄さんは西へ渡ったことはないんですか？」

「ある」

「じゃあなんで翼使わねえんです？　俺じゃあんな魔法道具使えねえし、レオパルドは犬だし……」

魔法使いになりたかったドルマガスは不思議そうに言いました。

「兄さん、まさかまた女神の縛りですか？」

「当たり前だ、レオ。カメラの翼の使用を禁止されている。誰かにもらったり、拾ったりした場合をのぞいてな。また、手に入れたら15分以内に使わねばならない」

全く、女神様は意地悪が好きですね。

「旦那、また女盗賊にもらいに行きましようよ」

「いや、『くれ』というのも禁止だ」

一体どうすりゃいいんですよ……と、がつくりと肩を落とすドルマガス。

「……兄さん、船ですか？」

「さすがだなレオ。また当たり前だ。私は思い出したのだ。……古い文献で見たことがある……トロデー南西、昔海だった場所に古代船が打ち捨てられていると……それがこ

「こた」

マルチェロが立ち止まった所は、何も無い荒野でした。

「ここは……確かに昔は海だったんでしょうね」

レオパルドがクンクンと鼻を効かせます。

「旦那あ、船らしきものは見当たりませぬね」

「……かなりの大きさのはずだ」

「ちよつと待つて下さい……」

レオパルドがマルチェロの側を離れ、小高い丘に登りました。

「ワオン！」

「レオ、どうした！」

「船……船のあつた跡があります」

「なんだと、レオパルド。どういうこつた？」

「……船はあつた。確かにあつた。しかし、何者かがそれを掘り起こした……」

「ザザーン……ザザーン……」

波の音が遠くに聞こえた気がします。

「どうすればよいのか……」

項垂れるマルチェロ。

「旦那あ、仕方ねえ、魔物がキメラの翼を落とすまで戦いましょう。俺も頑張りますから……このあたりにはキメラやタホドラキーもいるみたいですよ……」

「そうですね。効率が悪いですよが仕方ありません。女神がくれた手漕ぎボートでは西の大陸までは渡れませんし」

「……やむを得んか……」

「……兄さん、今夜は天気もいいですし、一晩中月が出ているでしょう。少し休んでおきましょう」

レオパルドの提案にマルチエロが頷きます。こうして二人と一匹は仮眠を取りました。

先を急ぐあまり、ろくに休息をとっていなかった彼らは、心身とも疲れから、つい寝過ぎてしまいました。

ザザーン…ザザーン…。

聞こえるはずのない波の音。この地がかつて海だったというのは本当なのでしょう。規則的な波の音は心地好い子守唄。

月は中天にかかり、彼らと岩とが偶然に作り出した影が、不思議なことにぐんぐん伸びて、近くの壁に扉を作りました。

「……月が呼んでいる。女神が騒がせているようだ……」

扉が開き、中から月の精イシユマウリが人の世界に降り立ちました。

「……これは珍しい。この場所は以前訪れた……この地で古代の船に力を与えた……美しい音楽とともに潮が満ち……海の幻想が甦り……私のこの竖琴と歌が奇跡を起こした……私を呼んだのは誰か？ 月の悪戯か？ いや、間違いなく、誰かが私を必要としている。人の子よ……」

イシユマウリはお気に入りの竖琴をポロンポロンと奏でます。すると突然。

キラーン！

「うわっ！ マブっ！」

イシユマウリの投げ掛けた光が、まっすぐにマルチエロに当たりました。デコと胸に下げた金の首飾りに反射しています。ドルマゲスがびっくりして大きな岩に頭をぶつきました。

「お前か？ 私を呼んだのは」

イシユマウリが滑るように近づいて来ました。

「ぎゃあ！ お化け！」

「何だ貴様っ！」

ドルマゲスとレオパルドが即反応します。

「どうしたのだ？ つ、月は？ 月は出ていないのか？ 明るいようだがもう夜明けか？」

「いえいえ、まんまるのお月様はあなた方の頭上にいらっしやいます。」

でも、月明かりの下なのに、マルチェロの目は見えません。

「……人の子よ……」

イシユマウリはマルチェロのデコ……ではなく、首飾りに手をかざしました。

「私には見える。この首飾りが教えてくれる……。お前はマルチェロ……暗黒神の杖で法皇を殺めた男……」

「誰だ？ 何をしている？ 何故見えん！ レオは……レオはどこだ！」

激しく混乱するマルチェロ。こんな時でも頼りにしているのはドルマゲスではなくてレオパルドなのです。

レオパルドは、マルチェロにぎゅうと身体をくつつけます。

マルチェロは安心してようにレオパルドの背中を撫でました。

「お前は女神に視力を奪われたのですね……私の力もまた、お前の視力を奪うようです。目が見えぬとは辛いこと。まずは私の……月の世界に來なさい……」

イシユマウリは月の世界への扉へ誘います。超常現象など信じないマルチェロでしたが、まるで催眠術にかかったかのように、扉の中へふらふらと歩いて行きました。ド

ルマゲスとレオパルドも吸い込まれるように後へ続きます。

「……ようこそ。月の世界へ。私の名はイシユマウリ」

イシユマウリの世界に入ると、不思議なことにマルチエロは見えるようになりました。

「イシユマウリ……その名前は……貴殿は……もしや願いの丘の？」

「……アスカンタの近くにそういった場所がありますね。何度か訪れたことがあります」

「んじや、願いを聞いて下さるんで？」

ドルマゲスは、あの顔で子供のようにはしやぎます。

「人の子よ……お前の願いがわかる。……今のお前の願いは船だ。お前たちは船が必要だ。しかし時間とゴールドがない。だから古代船を……」

イシユマウリはそこまで言うと、マルチエロの首飾りから手を離しました。

「月の精、イシユマウリよ……我らのことがわかるならば、お力添え頂きたい。我らは女神の命を受けている」

「違いますね。人の子よ」

イシユマウリの言葉に、マルチエロがハッと顔を上げました。

「違わねえよ、マルの旦那は……」

「よせ、ドルマゲス……」

マルチェロのために反論しかけたドルマゲスを、静かに制しました。

イシユマウリは目を閉じます。

「星の奏でる音楽を……月の歌をお聞きなさい。お前は答えを知っている……マルチェロ、お前は懸命に生きました……」

「ちよつ……あんた何を言ってるんだよ、旦那はまだ死んでねえ」

「ドルマゲス……お前は女神の子。犬よ……お前も女神の子。だがマルチェロ……お前は人の子」

「私は人の子の願いを叶えよう……。ついて来なさい」

一行はイシユマウリハウスから再び現実世界に戻ります。

イシユマウリは海辺に立ち、豎琴をかき鳴らしました。

「人の子よ、私は無から有は造り出せぬ。よつてお前に船を与えることはできない。しかし、暗黒のラプソーンを倒す目的のため、お前たちを西の大陸へ送ることはできる。その先は自分で何とかしなさい。マルチェロ、お前の罪の償いの旅です。必ず目的を果たすのです。お前を覚えている全ての者のために……」

豎琴の音が強く響き、マルチェロ、ドルマゲス、レオパルドの身体が浮いてきました。

「さあ、行くのです、マルチエロよ。西へ！」

マルチエロは西の大陸を念じました。

ベルガラツク、ベルガラツク……。

ギャリング邸

「さつ…砂漠！ 旦那あ、ここはベルガラックじゃねえです」

「分かってる！ この月明かりだ。貴様に言われずとも、ここは砂漠だ」

何ということでしょう。ベルガラックを念じたはずなのに、その南、砂漠地方にきてしまいました。

「さみー。砂漠つてのはこんなにさみい所なのか？」

「砂漠は昼夜の寒暖の差が激しいんだ。そんなことも知らないのか。バカめ」

「んだと！ お前は犬ツコロだから暑かろうが寒かろうが関係ないんじゃないか！ 俺

様はデリケートなんだよ」

「ふん！ どこがデリケートだつて？」

「止さないか、二人とも。向こうを見ろ。灯りが見える。教会かも知れぬ」

いつもいつも喧嘩をするドルマゲスとレオパルド。マルチエロも最近は放っておくようにしています。あれはあれで、彼らなりのコミュニケーションの取り方なんだろうと悟ったからです。

「おっ！ 本当だ！ 旦那あ、良かったですね。さあ、足元に気をつけて急ぎましょう」

夜ですから目が見えているマルチエロなのですが、ドルマゲスがそんな風に気を使うので、自然に笑みがこぼれました。マルチエロはそういうことにちよつと弱いようです。

「こんな夜更けに何のご用ですか？」

「ようやく砂漠を越えることができました。朝まで休ませて頂けますか」

月明かりの入らない教会に入ると、またマルチエロは見えなくなりませぬ。本当は野宿でもしたいところですが、ドルマゲスが寒がるので仕方ありません。

「ではこれまでの行いを告白なさい。そしてゆっくりして行くがよろしい」
「かたじけない……」

レオパルドも入れてもらい、教会の隅で夜を明かしました。

さて、次の朝。砂漠の教会からベルガラックへ向かいます。ドルマゲスの空腹のせいで歩くスピードがかなり落ちてしまいました。

「だ、旦那あ、俺あ腹が減って腹が減って……」

「またか、ドルマゲス。お前はガキか？」

「うるせえ、犬！ 俺さまは代謝がいいんだよ。一日5食くらい食わないと力が出ない

んだよ!」

「無駄な動きが多いからすぐに疲れるんだらう? 少しは考えろよ、アホ芸人め!」

「なに? 犬のくせに威張りやがって! 芸人バカにするな!」

空腹で力が出ないはずなのに、レオパルドとの言い争いは元気にできるドルマゲスです。ところで、ドルマゲスは道化師ではなかったのでしょうか。いつの間にか芸人を名乗っていますね。二人の漫才、いえ、やり取りが終わるのを冷ややかに待っていたマルチエロは、ふうつとため息をついて言いました。

「ベルガラックへ行けば食事ができる。今あるゴールドではパン一切れとスープだけだぞ。それでよければ、魔物は無視して急いでベルガラックに行くことができる。だが、少しでも良い食事にありつきたいのなら魔物を倒して食事代を稼がなければならぬ。美味しいものが食べたければ働け。どうするのだ?」

道中、魔物はほとんど襲い掛かってきません。なぜなら魔物は、マルチエロが強いと分かっているからです。怖くて近寄らないのです。夜行性の魔物なら気の荒い者が多いので、よく襲ってくるのですが、日中の魔物はドルマゲスがおとりになっておびき寄せなくては戦う事すらできません。

「うう……、しかたがありません。メシのためなら……!」

ドルマゲスは半べそをかきながら先頭になって歩きます。マルチエロとレオパルド

が少し離れると、すぐに魔物がドルマゲスを襲います。ドルマゲスはそのたびにギャーギャーと逃げまどい、マルチエロとレオパルドが救出に走ります。

「だから、もう少しおとなしく逃げられないのか！ ガウツ！」

「だ、だ、だ、だつてよう……」

レオパルドにたしなめられますが、怖がりのドルマゲスは襲われると一目散に逃げさせていただきます。まったく、立派なりアクション芸人のようでした。

そんなこんなで夕方近くになってようやくベルガラックに到着しました。

「旦那あ、旨いっすねー。こんな料理、食ったことありません！」

やっとの思いで食事でありつけたドルマゲス。マルチエロは先にゴールドを渡し、たぐさんの料理を運んでもらいます。ドルマゲスはその顔で目をキラキラさせながらつがつと頬張り、次々皿を重ねます。

ものすごく気味が悪い絵づらでしたが、マルチエロには見えないのが幸いです。マルチエロは坊つちやん育ちですから、食事の行儀には非常にうるさいのです。

「ふうー、食った食った。いやあ、いいところだ。ベルガラック！」

「お客さん、そんなに気に入ってくれたのですか？」

ドルマゲスの声は相当大きかったですでしょう。まだ少年らしい面差しの男が声をか

けてきました。

「ああ！ 綺麗だし、食いもん旨いし、活気があるよ。こないところだと思わなかった。あんたも気に入ってるのかい？」

彼ははふふっと笑い、ゆっくりして下さいね、と言いました。

「なんなんだ？ あの小僧……」

ドルマゲスが彼の背中に小さく捨て台詞を吐くと、隣のテーブルの客が話しかけてきました。

「あんた、知らないのか？ あの兄ちゃんはフォークさんつつつて、カジノのオーナーだ」

「へえっ？ あんな小僧が？」

「若いったつて、苦労してなさるんだ。大体、親父のギャリングがいなくなつてカジノが閉鎖され、危うくサザンビークに乗っ取られるところで、妹のユツケちゃんと後取りの試練を乗り越えたんだ。大したもんよ。あの兄妹は……親父のギャリングは、行方不明だが、噂によると賊に殺されたつて話だ。熊も片手で捻るあのギャリングがなぜ？」

……ギャリングのこと知らねえか？ 男気あふれるいいヤツでな……フォークさんとユツケちゃんだつて、本当の子じゃねえ。捨てられてたのを自分の子として大切に大切に育てたんだ。……おい、若いの、大丈夫か？ あんた、見かけによらず人情に厚いん

だな！」

ギャリングの名を聞いて、ドルマゲスが涙と鼻水をだらだら流します。もつと綺麗に泣けないものでしょうか。

黙って話を聞いていたマルチェロは、その客にフオーグを呼んでもらいました。

「オーナーのフオーグは私ですが、何か問題でも？」

「いや。フオーグ殿。実は私たちはギャリング殿に会いにきたのだが、今しがた聞いた所によると、ギャリング殿は行方不明とか……本当ですか？」

「ええ。実は何者かに殺害されて……」

「それはそれは……お気の毒なことです」

フオーグは、盲目の僧マルチェロに興味を持ったのでしょうか、失礼しますと言って同じテーブルにつきました。

「父をご存知なのですか？」

「いえ。直接は存じ上げません。素晴らしいカジノを経営してらっしゃることは、アスカンタの山向こうまで聞こえております。……そういえば南の大陸で、賭け事に強い男の噂を聞きましたね。このベルガラックにも来ているのだろうか。お気をつけなされよ。僧侶のなりをして、イカサマもし、おまけに女性にも手を出すという噂です。フオーグ殿には妹御がおられるとのことですから」

それを聞いてフォークは、あはははと、ややお手上げ風に笑いました。

「お兄ちゃん、それ、ククールのことじゃない？」

いつの間にか妹のユツケも来ています。

「ああ、妹よ。そうだろうね。間違いない、ククールのことだ。お前を口説きはしなかったが」

「ククールだったら、スロットでやってくれたわ」

「スロットですか？」

マルチエロは、ククールがやはりこんなところでも名が知れていることにちよつぱり嫉妬しました。

「うん。ククールだったら、3時間でコイン20万枚ためてね。伝説のグリーンガムのムチを持ってかれたわ。大赤字よ」

「……まあ、妹よ、いいじゃないか。竜骨のクエストには力を貸してもらったんだし」
「そうね。ククールのおかげでぼったくりカジノつて言われずに済んでるもんね」

歓迎されているのかいなのか、ククールの評価は微妙なところだ。

「ところで、フォーク殿、ユツケ嬢、ギャリング殿の話の聞きました。私にも冥福を祈らせて下さい。彼の勇気と、優しさを称えたい」

マルチエロの言葉に、フォーク、ユツケの兄妹は顔を見合せ、少し神妙に微笑みまし

た。やはり、身内を殺された傷は、そうそう癒えるものでもありません。この世にたつた二人のきようだい。その様子を感じ取ったのか、マルチエロもほんの少し、フオーグとユツケの20万分の1くらい神妙になりました。

ずっと泣き続けているドルマゲスと共に、マルチエロはギャリング殺害現場を訪れました。

心地いい低音で唱うように詩編を紡ぐマルチエロ。フオーグとユツケもうつむき加減で涙をこらえます。

最後に女神の秘宝を置くのはドルマゲス。頭上に掲げ、頭を垂れたままゆつくりと床に置きます。秘宝は他の人には見えませんから、端から見たらドルマゲスの動作は何とも間抜けでした。

「ありがとうございます、お坊様」

「ククールとは大違いね。同じお坊様とは思えないよ」

丁寧な頭を下げる兄フオーグに対し、ペラペラと悪態をつく妹ユツケ。きようだいとは、どこも一緒なんだな、とマルチエロは思いました。

——そうすると、フオーグの低い姿勢は、ポーズに違いない……。

何でしょうね、みんながみんな、マルチエロみたいな長男じゃありませんのに。

とりあえず、そんなこんなで4つ目のお使いが済みました。次はリブルアーチへ行く予定です。

「今からリブルアーチに？」

旅立つ準備をしていると、ユツケが話してきました。

「先を急ぐのでな」

「えー？ マジ信じられないっ！ カジノでちよつと遊んでいけばいいのに。お坊様だつてたくさん来るよ。お酒もあるし。ねーねーいいじゃない！」

ユツケは執拗にマルチェロを誘います。

——なぜ、このような種類の者が回りに集まるのだ！ ククールといい、ドルマゲスといい、そしてこの娘！

「もう今日は遅いから泊まっていきなよ。今からリブルアーチなんて真つ暗だよ？ 雨だし」

「何？ 雨だと？」

「ホントだ。旦那、雨ですぜ」

「仕方がない。一泊して行こう。レオ！」

マルチェロは、今一番信頼し、側にいてほしいレオパルドの名を呼びました。屋敷の入り口で待機していたレオパルドがさつと頭を上げました。

「ユツケ嬢、レオは盲導犬だ。宿屋に入れても構わないだろうか」

「うん、もちろん！ あたし一緒に宿屋に行つて、事情を話すよ。さ、行こう」

ユツケはマルチェロの右手を、自分の左肩につかまらせました。マルチェロは感動しました。手をひかれるより、このほうがずっと歩きやすく、安全なのです。

——さすが、苦勞している人間は違う。

ユリマに少女らしい優しさ感じたのとは違い、ユツケにはプロの实力を感じました。また一つ、人の優しさに触れたようですね。

感服しながらギャリング邸の階段を降りていると……。

「ううっ！」

マルチェロが突然頭を押さえました。階下の扉の方からレオパルドの激しい吠え声も聞こえます。

「ワンワンワンツ！（兄さん、大変です！ 勇者が！）」

「やだ、どうしたのかしら、お坊様、大丈夫？」

にわかに外がざわついてきました。

「ユ……ユツケ様っ」

屋敷の使用人が慌ててやって来ました。

「どうしたの？ ケンカ？」

「あつ、いえ、ケンカではないんです。ちよつと魔物が……」

「何ですって？ あたし、戦うわ」

「いけません、ユツケ様。今、旅人が……」

「旅の人にそんな危ないことさせられない」

ユツケはマルチエロの腕を外し、手すりにつかまらせました。その間もマルチエロの頭痛はひどくなるばかり。

「待たれよ、ユツケ嬢……その旅人に任せるがよい……」

「え？ 何言ってるの？」

「それは……勇者だ……小僧とチビデブとチャラ男と娘だろう？」

「小僧とチビデブとチャラ男と娘？ ねえ、そうなの？」

「はっ、はい、ユツケ様、その通りでひえっ」

使用人はあんまり慌てて返事をしたので声が裏返ってしまいました。

「ユツケ嬢……私を裏口に連れて行ってくれないか。犬も。ここは勇者に任せ、やはり我らは先を急ぐ……」

「わかった」

無事に裏口を出たところで、ユツケが言いました。

「あの、お父さんにお祈りありがとう。お兄ちゃん、しっかりと見て見えるけど、いっぱい
いっぱいなどこあって。昔から泣きたいのこらえてるんだ。あたしが泣き虫だから
……。あの、これ……。お礼です」

ユツケが控えめに差し出したものは、キメラの翼でした。

リブルアーチで

「かーっ！ やりましたね、旦那あ。リブルアーチですぜ！ 勇者がやってきた時あ、ヒヤヒヤしましたよ」

ベルガラツクのユツケからキメラの翼を貰い、逃げるように翼を放ったマルチェロ一行。今度はちゃんと目的地のリブルアーチに到着しました。

ベルガラツクで降っていた雨、このリブルアーチでも同じように降っています。気温が少し低いのかもかもしれませんが、ベルガラツクよりも冷たく感じます。一行は石造りの道をハワード邸に向かって静かに歩いていました。

「……レオ、大丈夫か？」

「兄さん、すみません。足が……すくんで……」

月のない夜。レオパルドに先導されて歩くマルチェロですが、その歩みが次第に遅くなり、ついに止まってしまいました。マルチェロは腰をかがめ、優しくレオパルドの背を撫でます。レオパルドは鼻づらをマルチェロの身体に押し当て、どうにか安心を得ようと思いました。そのような様子を見ていたドルマゲスも、今回はケンカを売ることなく小さく息をもらしました。

「……レオパルドはリブルアーチである杖を拾ったんだもん……。犬だもんな、棒っ切れがありや拾うだろ……」

レオパルドは、チエルスを殺してしまったことを思い出し、どうにも進めなくなってしまうのです。黒く長い尻尾も後ろ足の間に入り、耳も緊張で震えています。

一行は、町へは入らずに、とりあえず雨の当たらない場所を探して腰をおろしました。

「なあ、レオパルド、お前だけは杖のせいだよ」

ドルマゲスがレオパルドの隣に座ります。

「俺だけ？」

「ああ。……俺は、きつと一番の悪者だ。トロデーン城からあの杖を盗み、師匠とサーベルトとオデイロ院長、それからギャリングを殺しちゃった。俺……師匠を殺した時、気づいてたんだ。こんなこととしてどうするって。いや、その前に、杖の力が強すぎて、俺じゃコントロールできないこともわかっていたんだ……トロデーン城に呪いがかかった時に。あれは、俺の予想外の力だった。だけど、あん時あ、とにかく力が欲しくて杖を利用し続けることにしたんだ」

マルチエロもレオパルドも、ドルマゲスのその話を聞くのは初めてでした。雨音がバラバラと木の葉を叩きます。

「……師匠を殺した時、暗黒神が息づいた。旦那とレオパルドならわかるだろう？ 杖

が息をしてるんだ。次にサーベルトを殺したとき、暗黒神の心臓の鼓動が聞こえた。杖がドクンドクンと脈動して、まるで、血が通ったみたいに」

マルチエロは、杖を手にした時、すぐにそれを察知していました。ドルマゲスの言いたいことはよくわかります。

「オデイロ院長を殺したとき、暗黒神は考え始めた。俺に意思を伝えてくるんだ。あの時は、それがなんだかはわからなかった」

マルチエロは、暗黒神の言葉を聞きました。杖は常に語りかけてきて、マルチエロの心を乱したのです。ドルマゲスの元にあつた時は、まだそこまでの力はなかったのです。

「……あいつは少しずつ、復活の力をためていったんだ。賢者を殺すことで。封印とかいうのが解けていったんだ。こうなったらもう駄目だ。俺はもう俺でなくなつて、ギャリングを殺した。その時、あいつに手足が生えた。あいつは動きたかった。身体が欲しかったんだ。俺という入れ物をコントロールしていたが、大きくなりすぎて収まり切れなくなつてきた。だから、闇の遺跡で入れ物である俺を育てた。へんな袋の中に俺を入れて。……そこへ、勇者がやって来て、俺は倒された……」

「……強かったか？ あいつらは」

マルチエロが尋ねました。

「旦那、あいつらは複雑な迷路を解き、多くの魔物をやつつながら遺跡の最奥までやって来た。俺の前に立つあいつらからは、空と海と大地のにおいがした……あつたかくて、強くて、ゆるぎない力。……俺はあの戦いの中で、負けていきながら、自分を取り戻していった。何故、力が欲しかったのか。何故、師匠を殺したかったのか」

ドルマゲスは空を見上げます。

つられて見上げるマルチェロとレオパルド。雨はまだ降っていましたが、薄い雲の向こうにぼやけた月の姿がありました。

「わかったのか？ ドルマゲス」

「ああ、レオパルド。お前もわかるさ。チェルスと婆さんのところへ行けば」

マルチェロは思います。ドルマゲスは、自分が殺した4人の現場を訪れた。泣き叫び、許しを乞うていた姿は、あれはドルマゲスがああいう性格だからではない。本心からの懺悔なのだ。現場に近づくにつれ、毎回怯えていた。今、レオパルドの足がすくむのも同じこと。

——私も同じようになるのだろうか……。

無言でレオパルドの背を撫でるマルチェロ。いつの間にかレオパルドの身体のこわばりがなくなっていました。

「兄さん、ドルマゲス、俺の話も聞いてくれ」

「もちろんだ」

レオパルドはゆっくりと座り直し、マルチエロとドルマゲスに寄りかかるような体勢になりました。

マルチエロは背を撫で続けます。

「……ドルマゲスが消えたあと、杖を持っていたのは女勇者……ゼシカだ。勇者たちはドルマゲスを倒したからもう大丈夫だと思っただろう。だが、甘かった。杖はゼシカに取りついた。彼女は、ドルマゲスを倒しても兄貴のサーベルトは生き返らない、トロデーンの呪いも解けないことに落胆していた。暗黒神はその精神的な隙間に入り込んだ。ゼシカは魔法使いとしてかなりの能力があったから、暗黒神はそれを利用した。ほとんどのつとりかけていたんだ。そしてゼシカにチエルスを殺させようとしていた」

「ここまで一気に話したレオパルドは、大きく息をつき、続けます。

「でも、勇者の仲間はすぐに杖を取り上げた。ゼシカはドルマゲスと同じにはならなかった。今ならわかる。ゼシカは杖の力など欲しくなかった。自分が何者か、どうすればいいのかわかったんだ。俺はこう考えた……恐らく、トロデーンの呪いを解きたいんだ。私利私欲のためじゃない。何の罪もないトロデーンの国民が石みたいに固まっちゃって、王は魔物に、自分と同じくらいに姫が馬になっちゃったんだ。助けたい、自分ならその力になれる……仲間と一緒にってな」

「仲間か……俺にや仲間なんていなかったな。俺は誰よりも強くなりたかった。誰からもバカにされたくなかった。……仲間。……俺になくて、サーベルトの妹にはあったものだ」

ドルマゲスはしんみりと肩を落とします。

「貴様には師匠がいたのだろうか？」

「はい……ですがね、旦那、親代わりに面倒を見てくれた師匠だったのに、俺は突っぱねた。身寄りのない俺にとっちゃ、たった一人の家族だったのに……」

ドルマゲスはまた涙と鼻水を豪快に吹き出しながらおいおいと泣き出しました。

「……俺は悲しいかな、犬なもんでね、ハワードのおっさんに忠誠を尽くしてました。チエルスがどんなにいいヤツかわかっていながら、俺におびえたりするのが面白くて……。俺はハワードのおっさんの威を借りてただけ……」

呪われしゼシカが落とした杖。それをレオパルドは拾ってしまった。

「杖を拾ったのも、犬だから、なんだろうか？ 仕方ねえよ」

「そうだ。ドルマゲス、だから俺は杖に忠誠を尽くした。簡単なことだった。……ハワードのおっさんもチエルスを少し疎ましく思っていたことを知っていたから、チエルスを殺したことを自分の中で正当化した。チエルの亡骸にすぎりつくハワードのおっさんの姿を見て見ぬ振りをした」

「で、次にオークニスに行つたんだな？」

「そうだ。もう俺は俺でなかった。翼が生え、空を飛んだ。暗黒神は、人間の主人ではできないことを俺にさせた。俺は人間に勝つたとまで思った。だから、婆さん一人殺すのなんて訳のないことだった……。俺は……。俺は……。残虐な行為が快感だと思つてしまった……」

レオパルドは犬です。主に忠誠を誓うことや、獲物をとることは犬ならではの習性。マルチエロは思います。レオパルドを悪いと責められるだろうかと。しかし、だからと言つて身内を殺された悲しみを、仕方がないと諦めることはできない……。

——あいつらは気づいた。倒すべきものは、暗黒神なのだ。ドルマゲスを倒した時に気づいたのだ……。

——私に最後の一太刀を浴びせなかったのは、ゼシカに最後の一太刀を浴びせなかったのと同じ……私はあいつらの仲間ではない。なのに……何故……。

「……兄さん、ドルマゲス、俺は行く。俺が殺してしまった人のところに、女神の秘宝を届けます」

レオパルドは、そう言うのと、すつと立ち上がりました。

精悍な顔を月に向け、遠吠えをしました。

細く悲しい声は、遙か北のオークニスまで届くかのようでした。

レオパルド、昔の主に会う

月の薄い光が注いでいましたが、暗い街の中です。レオパルドがマルチエロの目となり、ハワード邸に向かいました。もう足がすくんだりはしませんでしたが、まだ少し緊張が残っているのでしょうか、引き綱を通してマルチエロに伝わっていました。

「大丈夫か……レオ。辛かったら言え。私が何とかする。だから暴れたりするなよ」「アイサー」

夜のハワード邸はひっそりとし、人の気配はありませんでした。

「灯はついてますね……」

ドルマガスは門の外から中を伺いました。ためしに押してみると、門は開きます。一行は静かに門の中へ。

レオパルドがある方向を向いて言いました。

「あれは……俺がいた檻だ」

見ると黒い鉄格子でできた大きな檻がありました。かつて自分のすみかだった場所。あの前でレオパルドはチエルスを手にかけてたのです。

「お前、いい暮らししてたんだな……」

ドルマゲスは大きな檻と屋敷とを交互に眺めながら呟きました。マルチエロも、あの檻はマイエラ修道院の宿舎より広いな、と思いました。

屋敷の呼び鈴を鳴らすと、すぐに使用人が出てきました。しかし、ハワードは街へ飲みに出ているとのこと。仕方がないので酒場をあたすことにしました。

「兄さん、リブルアーチへは？」

「ああ、騎士団時代に何度か来たことがある。ハワード氏には会ったことはないが、酒場の場所はわかる。着いてこい」

マルチエロは酒場を目指しました。

「お客さん、犬は困ります……」

酒場の店員は、丁寧かつ慇懃にいました。

「無論、入店するつもりはない。ただ、ハワード氏を探しているだけだ。犬のことで会いたいのだ」

「ハワードさんですか？　ちょうどおいですよ。ちょっとお待ち下さい」

店員はハワードの名を聞くと、そそくさと店の奥へ入って行きました。

さすが、ハワードは有名人なのですね。

「お坊様、どうぞ、お犬さまも一緒に、お席へご案内致します」

マルチエロの『ハワードに犬攻撃』が決まったようです。一行はついたてで仕切られた広いスペースに案内されました。

ハワードは背の低い、厳めしい顔をした男でした。派手な顔と派手な衣装が互いに主張し、黙っていてもやかましい雰囲気をかもし出しています。

「わしがハワードじゃが、何か……ッ……レオパルドちゃん？」

ハワードはレオパルドを見るなり一目散に駆け寄りました。

「やはり、ハワード殿、あなたの犬の名はレオパルドでしたか」

マルチエロは予想通りと言わんばかりの落ち着きようです。

「あつ、いや、そんなはずは……。失礼した。わしが大呪術師のハワードじゃ」

「私はマルセリーノ。僧侶です。この犬はレオナルド。私の盲導犬です。そしてこの者はドルトムントと言いまして、共に旅をしております」

いつもは本名を名乗るのに、なんとなく偽名を考えてみたマルチエロです。

「旅のお坊様が何か……？ 確か、犬のことだと」

マルチエロには見えませんが、ハワードはレオパルドをじつと見つめたままです。

「はい。そのレオパルドのことで少し伺いたい。構いませんか？」

マルチエロの落ち着いた物言いにすっかり信頼を寄せたハワードは、椅子を勧めまし

た。

食事も頼んでくれて、お酒も用意してくれます。太っ腹です。

「レオパルドは、よい犬だった。わしに忠誠を誓ってくれた。強くて優しく……だが……」

ハワードは涙と鼻水を同時に吹き出させ、濃い顔を更に飾ります。

「クウン（……すいません、ハワードさん……俺が早くに気づいていれば……）」

レオパルドはハワードの手にそつと鼻をつけました。

「本当に貴方の犬はレオパルドに似ておる。勇敢で、頭がよくて……」

ハワードはレオパルドを抱きしめ、おいおい泣き始めてしまいました。

酒場にいた他の客たちも心配そうに集まってきます。その中に、ハワードに負けず劣らず頑固っぽいオヤジがいました。

「おい、その犬はレオパルドじゃねえか？」

「ウオン？（ライドンのおっさん？）」

「失礼、私は目が見えないのだが、貴殿はどなたかな？ 私の犬はレオナルドというのだ

が、やはりハワード殿のレオパルドに似ていると？」

ライドンは、おうよと言って、マルチエロたちの席につきました。

「俺はライドン。石工だ。このハワードとは昔馴染みでな。レオパルドのこともよく

知っている」

ライドンは、運ばれた酒を勝手にカパカパ飲んでいきます。肝心のハワードは、まだレオパルドに抱きついて泣いていました。

「……実は、我らはチエルス殿に会いに来ました……」

「何だと?」

チエルス、と聞いて、酒場中がしんとします。しくしく泣き出す女性もいました。

「ライドン殿、実は私たちはリブルアーチへは以前来ています。その時、このレオナルドが怪我をしましてね。私はどうにも動けなくて困りました。……そこへ偶然チエルス殿が来て、レオナルドの手当てをしてくれたんです。……今だから言いますが、ハワード殿に内緒で、犬小屋に一泊させてもらったのです。あのお礼を是非したいと……もっと早く伺えばよかったのですが……」

「そうだったんですか。チエルスは優しい若者でした」

マルチエロの作り話に、ライドンもコロツと騙されています。女神は、「マルチエロは嘘をついてはいけない」も試練に加えればよかったと後悔しているでしょうね。

そんなマルチエロのウソ話に、他の客も集まって来て、皆でチエルスの思い出話に花を咲かせました。

「ハワードさんたら、あれからめつきり元気なくしちゃって……。また犬と暮らしたら

「いいのよ」

「そうさ、レオパルドは暗黒神に操られてたんだ。悪くない。悪いのは暗黒神だよ」

「しかし、チエルスはかわいそうだったな……優しくて、あんたにずいぶん気を使つてた
だろう？ あんたもそれを反省したんだ。いつまでもくよくよしてたら、チエルスも浮
かばれねえよ。あんたの呪術は俺の作品と同じで、リブルアーチの宝なんだからよ！」

ライドンはハワードの背を豪快に叩きます。

「そうですよ、ハワードさん。また、新しい呪術を会得して、怪我人を治してやって下さ
いな」

「それより、うちの娘に呪術を教えてやってくれ。ハワード魔法学校を今こそ開校すべ
きだよ……」

皆に励まされ、ハワードはようやく顔を上げました。

「魔法学校……」

「そうですよ！ ハワードさんがいつまでもくすぶつてたんじゃ、おうちの釜も宝の持
ち腐れになつてしまいます」

「わしは、わしのしたことは、チエルスが許してくれるだろうか。あんなに冷たくしてし
まつて……殺されてしまつて……うつ、うつ……」

「何言つてるんだよ、これからあんたがチエルスに報いるために、呪術を広めりやいいん

だよ」

「そう。泣いてたつてはじまらなねえ。……さあ、景気よくやろうじゃないか！」

なぜか酒盛りが始まり、一晩中わいわいと盛り上がりました。チエルスが殺されてから、リブルアーチの酒場がこんなに活気に包まれたことはありませんでした。マルチエロのウソ話も、女神は許してくれることでしょう。

宴が終わったのは明け方近く。マルチエロ一行はハワード邸に向かいました。べろんべろんに酔ったハワードをドルマゲスが抱えています。

「……チエルス……わしが悪かった……。レオパルド……かわいいそうなことをさせた……あんなことをする犬じゃなかった。すまなかつた……」

「クウン……クウン……（ハワードさん、謝らないで下さい。俺は大丈夫です）」

ハワード邸の門を入ると、レオパルドはすぐにチエルス殺害現場に向かいました。

「アオーリーン」

「レオ、わかるのか」

レオパルドは鎮魂の祈りを込めて遠吠えします。マルチエロも祈りを捧げました。そして、女神の秘宝を現場に手向け、5つ目のお使いが終わりました。

「ほう、オークニスに……」

チエルスに女神の秘宝を捧げ、ハワード邸で休ませてもらったマルチェロ一行。二日酔いの冷めやらぬハワードと昼食をとっていました。

マルチェロ一行がこれからオークニスに向かうと聞いて、ハワードはちよつぴりさみしそうです。

「レオパルド……いや、レオナルドは本当にいい犬だ。……お坊様の盲導犬でなければ、譲ってもらいたいくらいだ。……いや、犬は主人と共にあるのが一番の幸せじゃ。どうかレオナルドを大切にして下さい……」

ハワードはレオパルドをなでる手を止め、マルチェロに握手を求めました。

レオパルドはマルチェロの手を鼻で誘導します。

自分の鼻の上で交わされる握手。レオパルドはこの二人に会えてよかったと思いました。そしてチエルスにも……。

オークニスで

リブルアーチでのお使いを終えたマルチエロ一行。今度は雪国オークニスを目指します。

「マルの旦那あ、オークニスは雪国なんですよ。俺、寒いのは苦手だ……近道でもないものか……」

オークニスへは国境のトンネルを抜けなければたどり着きません。ルーラできないとすれば、それが一番の近道でした。

「ヒーツ！ 寒い寒い……トンネルも凍ってますぜ……」

「兄さん、ゆっくり行きましょう。滑ります」

ドルマゲスが寒い寒いを連発しながら先導し、レオパルドはしっかりとマルチエロを誘導します。北風の待つオークニス。トンネルの内部は寒いとはいえ、雪も入ってこない安全地帯と言えましょう。

マルチエロは考えます。

——殺めた賢者に女神の秘宝を届けるというこの旅。ドルマゲスもレオパルドも、旅が進むにつれ落ち着いてきている。それは、懺悔が賢者に届いたのか……女神が許した

もうたのか……。

何かを吹っ切ったようなドルマゲスの表情。いえ、普通の人にはわかりませんよ。あの奇抜なメイクの下に隠された表情なんて。一緒にいたマルチェロだからこそ、わかったこと。……ただし、ドルマゲスが掴んだであろう「何か」が何なのか、今のマルチェロにはわかりません。

——レオパルドもメデイ婦人に女神の秘宝を捧げたらわかるのだろうか。私はサヴェツラで何を感じるのだろうか……。

寒さのせいでしょうか、マルチェロは先ほどからずっと、自分の行く末が気になり、ネガティブ思考になっています。でも、そんな心配を表には全く出さないマルチェロでしたので、レオパルドもドルマゲスも当たり前のように先へ進みます。

「……兄さん、ところで、ベルガラックの後、勇者に会いませんね。」

「ああ、そうだな」

これまで何度もニアミスを起こし、頭痛に悩まされたマルチェロです。彼らのことなんてすっかり忘れていたのに、ドルマゲスのせいで思い出してしまいました。なんだか頭も痛くなってきた気がします。

——そういえば、あいつらはベルガラックに現れた魔物を倒したのだろうか……。

「それから旦那、勇者が危機の時は俺たち、助けに行かなきゃならないんですよね？ ま

「だ一度も助けに行つてないですが、勇者は強いから俺たちの力はいらねえんですかねえ」

——そう言えば、女神は確かに「勇者がピンチの時は助けなければならない」と言っていたが……。

「勇者にピンチが訪れていないってことですか？」

「さあ、わからん」

——我らの助けなどなくとも、戦い続けているのか……。あるいは戦いを避けているのか……。

そう思いながらも、「戦いを避けている」に5000ゴールドだな、と一人賭けをしているマルチエロです。まあ、マルチエロでなくとも避けているほうに賭けたくなるでしょうね。リーダーがああの一瞬とした顔のエイトさんですから。

「兄さん、トンネルを抜けます」

「そのようだな。視界が明るい。レオ、気をつけて進んでくれ」

「アイサー」

トンネルを抜けると、そこは猛吹雪のまっただ中でした。

「ヒーツ！ 何だこの寒さは！」

「ちっ！ 先が見えねえ……兄さん、引き綱を短く持つて下さい。そしてしっかり俺の後ろ……うわっ!!」

「ぎゃあーッ」

ズザザザザザー！

爆音とともに、右手の山から雪崩が一行を襲います。

* * * * *

ポツポツポツ

ポツポツポツ

何の音だ？ 湯が沸いているのか？ 暖かい……。

「クウン」

——レオか？

「旦那あ……」

——皆、無事ということか。

——確か、雪崩に巻き込まれて……そして……。

「……よ、……子よ……」

——誰だ？ 私に話しかけるのは？

「人の子よ……」

「もしや女神？　女神なのか？」

「お前はまた、私の世界と人の世界の間に来ました」

「どういうことか？　レオとドルマゲスはどうしたのだ」

「しかし、このようなことで私の秘宝を届ける使命を止めることはできません」

「私は死んでいるのか？」

「今、一度、人の世に帰るがよい」

「やはり、死んだのだろうか」

「我が使命を忘れてはなりません」

「レオはどこだ！　何も見えん……」

「さあ……ゆくのです」

「女神よ！　教えて下さい！」

「えっ？　何ですか、急に？　私は忙しいのです。お前が父と呼んでいるオデイロが毎

日毎日お前のことをあれこれうるさくて、用事がちつとも進みません」

「それは申し訳ない……。……で、一つ聞きたいのだが……」

「全く、師父も師父なら弟子も弟子……」

「女神よ、勇者のピンチには、我らはどうやって訪れたらよいのか……。勇者一行には姿

を見られてはならぬと言ったのは、女神よ、貴女だ。どうやって……」

「……ああ、そのことですか。それは気にしなくてよろしい。勇者が、誰かに戦いの手伝いを望んだとき、その時こそ、戦場に赴くのです。特別な呪文によって呼ばれますから、安心なさい……さあ、行くのです！」

マルチエロは夢の中で女神との微妙に噛み合っていない会話を終え、目を開けました。見えてませんけど……。

* * * * *

「旦那ア！」

「ウオン（兄さん、よかった、気がついて）」

「レオ、ドルマゲス……無事だったか……」

マルチエロは右手を空に差し出します。レオパルドはすぐにその手に顔をよせました。マルチエロの表情に安堵が浮かびます。

「……お坊様、気がつかれましたか」

聞き覚えのない男の声が近くでしました。

「貴殿が助けて下さったのか、かたじけない。命の恩人だ」

「いやいや、お坊様たちを見つけたのは、犬のバフだ。それに、お坊様の黒犬。大したものです。レオパルドとか言いましたね。不思議と何か運命を感じます。いい犬です」

レオパルドは、自分が殺してしまったメデイ婦人の息子、グラッドに頭を撫でられ、静かにうつむきます。

「ところでお坊様、目が見えないのに、こんな雪国まで何のご用事で？」

グラッドは湯気のたつマグカップをマルチエロに手渡しました。

「はい実は……っ……辛いですな、これは……。いやしかし、温まる」

「オークニス名物、ヌーク草を使ったお茶ですよ」

マルチエロはこれまでのいきさつを話しました。

「……そうですか。私の母、メデイは隠してはいましたが、賢者の血を引いていました。家の裏にあります、七賢者の遺跡……それを母は頑なに守り続けていました。あんなものを何故と……その理由がわかったのは、悲しいことに、魔物に母を殺されてからでした。……是非、お祈りを頂戴したい」

「わかりました。すぐに行きましょう」

グラッドに案内され、メデイ婦人の倒れた遺跡の入り口に来ました。マルチエロは静かに祈りを捧げ、レオパルドが秘宝をそっと置きました。

その時、マルチエロは見ました。薄闇の中、ぼんやりと照らす月光の力を借りて。

キラキラと光る女神の秘宝はメデイ婦人の姿を浮かび上がらせました。小柄な婦人は、優しい笑顔でレオパルドの頭をいとおしそうに撫でます。

レオパルドは気がつきません。しかし、マルチエロには見えました。女神の元から舞い戻り、賢者の力を秘宝に込めるメデイ婦人。強い光が秘宝に注ぎ、秘宝はそれを閉じ込めました。そしてメデイ婦人は再び女神の世界に召されて行きます。ふわりふわりと……輝く白い翼に包まれて……。

——この翼は、死人の翼。ゴルドの底で見たオデイロ院長もこの白い光に包まれていた。

マルチエロは胸が少し苦しくなりました。反対に、レオパルドからは、神の洗礼を受けたような落ち着きと神々しさすら感じられます。

秘宝はあと一つ。前法皇は、メデイ婦人のように姿を現すのか、法皇はどんな顔で自分を見るのだろうかと考えると、マルチエロの胸は本当に苦しくなります。でも、やらなければ終わらない。

——我々は女神の使いの旅を始めたのだ。そしてその終わりは間もなく……。

一行は、グラッドに別れを告げ、サヴェツラへ赴くべく、北のオークニスから離れることにしました。

翼よどこに？

「旦那あ、またあのトンネルを抜けるんですかい？」

「仕方があるまい。他に手だてはないのだ」

オークニスでメデイ婦人の没した地に女神の秘宝を置いたマルチェロ一行。最後の地、サヴェツラへ行かねばなりません。でもサヴェツラは独立した島。定期船は出ていないもの、オークニスからの便はありません。どうやって島に渡るかが大問題でした。

「キメラの翼があれば……」

「言うなよ、レオパルド。リブルアーチか西の大陸まで行けば、キメラの翼落とす魔物でもいるだろうよ。そこまで我慢しろ！」

「お前に言われなくても解っている！ ガウツ！」

「バカ犬！ 噛むな、離せっ」

月あかりの中、白い大地を大きな犬と背の高い道化師が楽しそうにじゃれあいながら歩いています。かなり凶暴な見た目の黒い大きな犬と薄気味の悪いメイクをした道化師の笑顔……。道行く人はあからさまに怪訝な表情で引いています。しかし、目の見えないマルチェロは、レオパルドのリードをしつかり握り、その様子に微笑みを浮かべて

いました。

とりあえずリブルアーチへ向かうことにした一行。途中の教会で休んだりしながらどうにかリブルアーチへたどり着きました。でもリブルアーチ周辺では、キメラの翼を落とす魔物になかなか遭遇しません。ドルマゲスが囷になつて魔物を誘うのですが、強い魔物が多く、いくらマルチェロがものすごく強くてもちよつと飽きてきてしまいました。

「……兄さん、効率が悪いですね。囷のドルマゲスもこの調子では死んでしまいます」

ドルマゲスは既に死んでいるので、少し不適切ではありますが、マルチェロも「そうだな」と言つてレオパルドに同意します。ふらつくドルマゲスにホイミをかけてやり、少し休むことにしました。マルチェロの近くにいられて、ドルマゲスは心からの安堵の表情を浮かべます。

「旦那、俺あ、腹が減つて、腹が減つて……」

「またか！ お前はガキか！ ガウツ！」

いつもお腹を空かせているドルマゲスが、いつものように空腹を訴えます。レオパルドがこれまたいつものようにかみつきと蹴りをお見舞いしますが、相当な空腹なのでしょう、ドルマゲスは悪態もつかず、その場に寝そべったままでした。

「兄さん、ドルマゲスの空腹も、女神の呪いなんじゃないでしょうか」

「そうかもしれんな」

呪いではなくて試練です！ という女神のツツコミが聞こえた気がしましたが、マルチェロも同じように思っていたので、レオパルドの言葉を否定しませんでした。

「死ぬと、飢えと渇きに苦しむ餓鬼になるという話があるそうだが……」

「じゃあ、ドルマゲスは……」

「いや、わからん。どこかの世界の宗教観だ。だが私たちが信じている女神のいる世界にも、餓鬼とおなじような苦しみはあるのかもしれない」

「地獄とは違うのですか？」

「くわしくはわからんが、その世界では、神の裁きを受けたあと、重い罪を犯したとされた死者が様々な苦行を長い時間受けなければならぬ世界が地獄だということだ」

自分が死んだら一体どのような地獄にいくのだろうか、レオパルドとマルチェロは同じことが頭をよぎり、同じように口を閉ざしました。

しばらくそうして座っていました。夜も更け、寒さが身にしみてきます。周辺の魔物は、マルチェロたちから少し離れたところでじつと様子を見ているようでした。ドルマゲスのすうすうという寝息と、ときおり聞こえるぐうつという腹の音以外、無音でした。

「寝ちまいましたね、ドルマゲスは」

「そうだな……」

レオパルドも、フーンと大きなため息をつき、マルチエロの足元でリラックスしていません。

「レオ……」

「はい、兄さん」

「女神の秘宝を置いた時、どんな気持ちになったの？ 私は、最後の秘宝を届けなければならぬが……」

暗がりでもレオパルドの背をなでるマルチエロ。レオパルドはその心地よさに目を閉じていましたが、ゆっくりと顔を上げました。

「何といいましょうか……チエルスの方は、とてつもない後悔のようなものと懐かしさ、俺が生きてきた一生がどれほど罪深かったのかということ突き付けられた気がしました」

罪……でも、レオパルドは暗黒神の杖に触れるまでは、ごく普通の犬としての一生を送っていたのではないかとマルチエロは思います。

「……ばあさんの時は、何かこう……犬としての俺を認めてもらったような気がします」
「犬ゆえの行動ということか？」

「いえ……」

犬は棒つきれが大好きです。ガリガリ噛むのも大好きです。でも、自分手にしたときの杖は、犬にかじられた形跡はなかったことをマルチエロは思い出しました。

——暗黒神は、レオパルドにかじられた箇所を回復術で治したんだろうか。かじられた時は「痛い」などと言ったのだろうか。

自分でもばかばかしいと思えるような考えが浮かびました。でもレオパルドは真面目に話を続けています。

「……うまく言えないんですけど、この女神のお使いの旅の様子を、ばあさんは見ていて、それで、マルチエロの兄さんをすっかりサポートしている俺をほめてくれるような、認めてくれるような感じでした」

「そうか……。お前は本当に頼りになる、すばらしい相棒だ」

「兄さん！　ありがとうございます！」

「……っおい、よせ、くすぐりたいぞ……」

マルチエロに「相棒」と言われ感激したレオパルド。立ち上がってマルチエロの顔をべろべろと舐めまくります。

「す、すみません、兄さん」

恐縮するレオパルド。兄さんの頬はなんてすべすべしているんだ、と、最後にもう一度ひと舐めごちそうになってから再びマルチエロの足元に座りました。

マルチェロは苦笑いしながら思います。ドルマゲスはギャリングのところと同じように罪人としてのドルマゲスを認めてもらえたのだろうか。自分も法皇の館で秘宝を置けば、自らが犯した罪を突き付けられ、その後で法皇に認められるのだろうか。そして、ドルマゲスのように、餓鬼になるのだろうか。

いつの間にか夜が白々と明けてきます。マルチェロもレオパルドも、ドルマゲスの側でとうとうと眠ってしまいました。

空腹でふらふらのドルマゲスのために、リブルアーチへ行き、手持ちのゴールドをはたいて食べ物などを買います。そして夜を待ち、キメラの翼を求めてフィールドに出一行。でも、ここでも翼は手に入りません。

「仕方がない、ベルガラツク方面へ参ろう」

「すみません、旦那。俺に寄ってくるのはよくわからない四足の魔物ばかりで、飛んでるヤツはちつとも寄ってきやしません」

ドルマゲスがあんまり悲しそうに言うので、時にはレオパルドが困になりますが、やはり駄目でした。マルチェロが気配を消してうろついてみるも同じこと。無駄にゴールドばかりがたまっていきません。

こんな調子で夜な夜な魔物退治に精を出すマルチェロたちでしたが、翼が手に入るこ

とはありませんでした。

「今夜もまた駄目でしたね」

「もう何日経ったんでしょうね、旦那？」

ベルガラックからサザンビーク、ついでに砂漠まで行ってみましたが、翼は手に入りません。今は再びベルガラックの近くにいます。

「ここはキラーパーンサーばかり出ますね」

「世界にはいろいろなところがあるものだな……」

感心している場合ではありませんが、もうどうしていいかわからず、出るのはため息ばかり。

そんな一行をあざ笑うかのように、風だけが通り過ぎて行きます。

勇者に呼ばれる

キラールパンサーの巣でもあるのかと思えるほど、出会う魔物といえはキラールパンサーばかりの地域にいたマルチエロ一行。そろそろ場所を移そうかと相談していた時でした。

「うっ……!!!」

突然頭を押さえるマルチエロ。勇者一行が近くにいるのでしょうか。

「痛い!」

「痛え!」

なんと言うことでしょうか。レオパルドもドルマゲスも頭を抱えます。

「どうした、レオ! ドルマゲス、お前もか?」

頭を抱えた二人と一匹は、不思議な光に包まれて、どこかへ連れて行かれてしまいました。

「……さん!!!」

——誰だ? 私たちを呼んでいるのか?

何かの叫び声とともに、マルチエロたちは突然、どこかに着地しました。「いてっ」とか「ガウツ」とか聞こえます。ドルマゲスもレオパルドも一緒のようです。

——なんだここは！ 潮の香りだ。船の上か？

このままシージャックをしてサヴェツラに向かえるかもしれないと、イケナイ考えが頭をよぎった瞬間でした。

「走れ！」

誰かの声が聞こえました。反射的にマルチエロたちは無我夢中で走り出します。

目の前にはサメのような魔物が凶暴な牙をむいています。しかし、その場に集まっていた屈強な男たちは魔物などものともせず、船の反対側に走り出します。マルチエロたちもそれら魔物に体当たりしながら走り抜けました。

再び光に包まれて……。

「……つてえ……。何だっただ？ 今のは」

「わからない。……兄さん、大丈夫ですか？」

ドルマゲスとレオパルドはマルチエロを探します。

「マルの旦那あ！ どこです？」

「兄さん！」

マルチェロの返事がないので、二人はあわてて辺りを探し回ります。

「おい、ドルマゲス、ここはどこなんだ？」

「知らねえよ。波の音がするから、海辺だつてのはわかるが……あつ！」

ドルマゲスが見上げると、そこにはそびえ立つ不安定な岩。その上に堂々とたたずむ
法皇の館が……。

「……サヴェツラだ」

「何だつて？ サヴェツラ……？ じゃあ、ここは兄さんの……」

ゴウツと強い風。ドルマゲスは思わず体を折り曲げます。

海風は冷たく、レオパルドも身震いしました。

「マルの旦那あ……どこ行つたんです？」

「一体、何処へ行かれたのか……」

レオパルドは必死でマルチェロのにおいを探します。ドルマゲスも声を限りに名を
呼び続けました。

しかし、潮の香りと波の音によつて手がかりは消され、二人はマルチェロを見つけれ
ないまま、深夜を迎えました。

「なあ、レオパルド。お前、わかつただろ？ どうして賢者を殺したか」

二人は海風を避け、サヴェツラ大聖堂への階段の下に腰をおろしていました。

「ああ……わかつたさ、ドルマゲス。俺は……リブルアーチでも言ったが、悲しいかな、犬だからな。忠誠を誓ったんだ。俺より力のある杖に。操られながら、いい気にもなった。人間に勝った気がしたんだ。そして、そのまま暗黒神と共に、世界の頂点に立つつもりだった……」

ドルマゲスは深いため息を一度つき、大聖堂を眩しそうに見上げ、またレオパルドに視線を戻して言いました。

「俺は地獄へ行くんだ。……女神さまがそう言った」

「俺もだぜ、ドルマゲス」

「えっ?」

ドルマゲスは身を乗り出します。

「ちよつと待てよ、おい! お前は犬ところなんだから、仕方ねえだろ? なんでお前まで地獄に……」

「仕方なくないんだ。俺の意志が全くなかったとは言えない。杖を拾ってからチエルスを殺すまで、引き返す時間はあった。チャンスもあった。……だが、俺は戻らなかった。……毎日がつまらなかつたんだ。もちろん、生活に不満はなかつた。ハワードさんは俺をかわいがってくれたし、チエルスだって優しくかったから。……でも、それだけだった。

なんでもない日常の幸せに麻痺してしまっていたんだ……何が幸せか、そんなこと考えられないくらいに、俺は幸せだったのに……。勇者に負けていきながら、わかったのはそれだ」

レオパルドもフーンツと大きなため息をつきます。

夜の大聖堂。参列者はまばらなもの、途絶えることはありません。人々は、法皇のなきがらに祈りを捧げ、そして女神に暗黒神の力がなくなることを祈るのでしよう。

「マルの旦那は……」

ドルマゲスは再び大聖堂を見上げ、そして口をつぐみました。レオパルドも無言です。

月の光は万物に注ぎます。

かつて、月の光の中で杖を盗み、月の光とともに現れて賢者を殺めたドルマゲス。月さえ飲み込めると夢想し、杖の力に屈した……。

レオパルドもまた、月の光を受け、チエルスを殺し、メデイ婦人を殺した。未遂とは言え、法皇を殺そうとした。

「なあ、ドルマゲス、勇者は強かったな」

「ああ。暗黒神の呪いさえ弾き返したあのチビ。あいつ、普通じゃねえよ」

「ああ。でも、あいつ、いいやつだ。俺……あいつが主だったらいいな、と思った。でも

……」

「でもっ……」

参拝客が、暗がりに潜むレオパルドの姿を認め、ひっ！ と声をもらしました。ドルマゲスはレオパルドのリードをぐっと引き、背に手を当てます。

「……気安く触るんじゃないねえ……」

レオパルドは小さく歯をむき出し、ドルマゲスを少し睨みました。そして続けます。「でも……、今、こうして旅をして……マルチェロの兄さんを守りながら目的を果たす旅をしている。それが、俺は嬉しい。主に仕えるのが俺たち犬だ。ハワードさんは確かに俺をかわいがってくれたが、兄さんは、本当に俺を必要としてくれる。目の見える時間でも、俺を相棒として扱ってくれる。……犬としての俺を愛してくれてるんだと思う」

そりやそうです。マルチェロは本来は優しい性格なんです。動物にも優しいんです。リーダーシップバリバリですから、忠誠を誓う犬なんて特に大好き。おまけに、ドルマゲスと違ってレオパルドは強くて頼りになりますから、こんなに心強い相棒は他にいません。思いつきり愛してると思います。

「俺は、兄さんを助けたい。地獄になんて行かせちゃならない」

「そうだな。マルの旦那はまだ、女神さまのお膝元には行ってねえ。女神と人間世界とを隔てる川の向こうで審判を待ってらっしゃるんだ」

俺を悪漢から救ってくださったし……と付け加えるドルマゲス。

遠い目で大聖堂を見上げるドルマゲスを見て、パルミドの一件の真実は語らないでこうと誓うレオパルドなのでした。

ところで、当のマルチェロですが、突然船に連れて行かれた後、ドルマゲスが夢見心地で思い出している、パルミドのあの場所にいました。ええ、湯気の出ているあそこです……。

「いやあ、兄さん、いい身体してらっしやる……」

マルチェロの背中を流す半裸の漢おとこ。

「目が見ないって、大変よね」

冷たいタオルを手渡す半裸の漢オカマ。

「さあ、冷たいビールでも」

半裸の漢おとこに案内され、マルチェロは涼しく居心地のよい席につきました。

「いやあ、まさかお坊様が来てくださるとは！」

ビールを手渡すのは、ドルマゲスを誘拐したチンピラの親玉です。

「いやあ、お坊様、やはりお強い！ え？ なんて呼ばれたかつて？ あっしたちにもわ

からないんですよ。たまに呼び出されてねえ。女神さまの思し召しってやつですかね……あはは。報酬がサバ缶でのがナンですが……」

親玉の話に適当にうなずきながら、マルチエロは黙ってビールをあおります。

「ねえん……お坊様、しばらくここにいらしてえ」

ビールのおかわりを持たせる漢は、さりげなくマルチエロの手を撫でます。

「いやん……、しばらくだなんて！ ずっとここにいらしてえん」

別の漢がしなだれかかりながらおつまみをマルチエロの口に入れます。

「ちよつと！ 何よ、そのサキイカ！ お坊様はあたしのビールを飲むのよ！」

「うるさいわね！ 早いもの勝ちよ」

ビールのオカマとイカのオカマのケンカが始まってしまいました。

「……」

最後のお勤めの前に、嫌な疲れを溜めてしまったマルチエロです。

こんな調子でサヴェツラには行かれるんでしょうか……。

夢で会えたら

——さて、どうしたものか……。

ドルマゲス、レオパルドとはぐれてしまったマルチエロは、パルミドの井戸のサウナで一晩を過ごしました。

月明かりがまだわずかに残る明け方、マルチエロは井戸から外へ通ずる縄ばしごを昇ります。

——レオとドルマゲスはサヴェツラに向かったのだろうか……。

南の大陸からは確か定期船が出ているはずだと思ったマルチエロは、とりあえず酒場へ向かいました。あのマスターなら、何か知恵をかしてくれるかもしれないと考えたからです。

ぼんやりとしか見えない視界の中、懸命に酒場へ向かいました。

酒場の営業は終わっていましたが、一人後片付けをするマスターの姿がありました。

「おや！　あの時のお坊様じゃないですか？　どうなさったんです？」

マスターは、すぐさまマルチエロを店に入れてくれました。

「……実は連れとはぐれてしまったのだ。タバはサウナで世話になった」

マスターは暖かいお茶をマルチエロに出し、自分も水を持ってカウンターに座りました。

「賢者の巾いをされてらっしゃるのですよね……。すべて終わったのですか？」

「いや……。あとはサヴェツラの法皇さまのところだけだ。……マスター、サヴェツラに行きたいのだが、定期船は運航しているだろうか？」

「マイエラの船着き場からの定期船は通常通り運航しています。……でもお坊様、お目が……」

「ああ……マイエラまで行けば、修道院に助けを求められないかと思うのだが」

マルチエロの言葉に、マスターは深いため息をつきました。

「マイエラ修道院ねえ……」

「……」

マルチエロは、数日前に訪れたマイエラ聖堂騎士団の体たらくぶりを思い出ししました。パルミドにまで噂は届いているようです。

「……あそこのやり手の若い院長が法皇さまになるつてんで、ドンチャン騒ぎしてるらしいですよ。あつ、修道院には行かれたのでしょうか？」

「行つた。情けない限りだ。……私もあそこで学んだ。オデイ口院長は素晴らしいかただった……」

「そうだったんですか……。今は群れのリーダーが不在で、巢で羽を伸ばしているだけだと思いたいですが。マルチエロ新法皇は行方不明、主要な騎士団員の方々もゴールドに飲み込まれたと言うではないですか。マイエラの人たちは、それを信じようとしませんか。……お坊様、悪いこと言いません。マイエラに助力を求めても無駄です。いつそアスカンタのお城に求めたらいかがでしょうか……」

——それほどまでに……。私は騎士団をしつかりまとめていたつもりだった。私の右腕たる団員は、確かにゴールドの就任式に来ていた。他の者と。後のことは修道士の……。いや、修道士では騎士団をまとめられん。副団長は団長にちゃんと昇格したのだろうか。あいつは真面目だが、リーダーシップに欠ける……。古参の団員がしっかり固めれば大丈夫だろうが、みなゴールドに落ちたとすれば、気の荒いものたちを統率できていないのだろうか。……なんとということだ。私は騎士団を捨てたのか……。私はなぜ杖を取つたのだ？ ドルマゲスもレオパルドも、なぜ杖に操られたかわかったというのに……。私もサヴェツラに行けばわかるはずだろうに……。

マルチエロは頭を抱えてしまいました。酒場のマスターはそんなマルチエロに困惑ぎみです。

——女神よ、サヴェツラへは一人で行けということなのか……。

いえ、単なる手違いかと思いますが……。ドルマゲスもレオパルドもサヴェツラで待つてますよ。

——仕方がない。夜まで待ち、路銀を稼いで船着き場から定期船に乗ろう。

「マスター、身体の具合が悪いのだが、宿屋まで案内してもらえないだろうか」

「それはいけませんね。きつと地下サウナの空気が悪かったのでしょうか。すぐにご案内しましょう。私が話をつけます。ただし、お坊様、身の回りのお品にはお気をつけください。盗人が多いですから……」

「かたじけない……」

マルチェロは宿屋で夜まで休むことにしました。

「……騎士団宿舎並みに固い寝台だ……」

マルチェロは懐かしい感触に安心し、すぐに眠りにつきました。
久しぶりの熟睡……。

「……団長どの、マルチェロ団長どの？」

——誰だ？ ……夢だな。

「……どうしたんです？ そんなところで」

——私を見ているのか？

「……ずいぶん落ちぶれちまったようですね。団長どの」

——何だと？

「ゴルドでの約束、守って下さってるんですか？ みじめに生き延びてますか？」

——貴様っ！ ……身体が動かん！

「みじめというよりは、楽しそうですよ？ 行く先々でももてなされてらっしやるようだし。タベもサウナでお楽しみだったようですが？」

——バカ者め！

「団長どの？ あなたは団長でいればよかつたんじゃないんですか？ 暫定的な院長はいいとして。何が欲しかったんです？ 名誉ですか？ 地位ですか？ それとも世界征服でもするつもりだったんですか？」

——お前に何がわかる！

「わかりませんよ。だから聞いているんでしょう？ いや、団長どの。ご自分でもわからないんでしょう？ まさかサヴェツラへ行けばわかるとでも？」

——。

「自分の行動も省みないで、自動的に真実がもたらされるとでも？ ドルマゲスやレオ

パルドみたいに苦しみもしないで。なぜ、今一人なのか、その意味をお考え下さい」

——意味だと？

「ええ。オレを追い出してから、あなたの歯車は完全に狂った。オデイ口院長が亡くなったときは、騎士団はまだみんな一つになってた。ちゃんとまとまっていた。それなのに、オレを追い出して、勝手に外へ出た。変な人に取り入って。あなたはバカだ。オレをバカだバカだと言っていたけど、あなたのほうがバカだ。オレの仲間は最高だ。あなたより頼りなくて、おつちよこちよいで気が強い仲間だけど、自慢の仲間だ。あなたが取り入った腐れ坊主さえ、オレたちに頭を下げた。あなたは道を間違った。……言えよ！何が欲しかった？」

——やめろ。

「言えー。兄貴の欲しかったもの、そして今も欲しくて欲しくて仕方がないものは……」
——やめろーっ！

はあ……はあ……、はあ。

マルチエロは寝台の上でゆっくりと身体を起こしました。

まぶたの裏に、熱い陽射しが注いでいます。思い切り直射日光をあびた頭はガンガンと脈打ち、マルチエロの思考回路を麻痺させていました。

マルチェロは注意深く手を伸ばし、サイドテーブルの水差しを取りました。

「……なんとという夢だ。最悪だ……」

何度もグラスに水を注ぎ、ため息とともに水分を取り込みます。水差しが空っぽになる頃、ようやく頭の中に立ち込めていた霧が晴れてきました。

「最悪だ……」

最悪、と何度も繰り返すマルチェロ。秀でた額には汗がにじみます。それなのに、身体が震えて仕方がありません。

ふうつと大きく息をつき、握りしめていたグラスをサイドテーブルに戻しました。

——最悪、だ。

月の出まではまだかなり時間がありました。マルチェロは、最悪、と時々口に出す他は、身動き一つせずに考え込んでいました。

「……また眠っていたのか……」

朝方、嫌な夢を見、日暮れまで考えごとをしていましたが、また眠ってしまったようでした。まるい月が顔を出しています。女神の試練で視力を奪われているマルチェロは月光のもとでだけは見ることができます。

「行くとするか」

誰に言うともなくそうつぶやき、パルミドの宿を出ました。

——船着き場へ行く間、魔物を倒して路銀を稼ごう……。

マルチエロは船着き場へ向かいます。

——北の船着き場まではあと2時間ほどか。東へ行けばアスカンタ……西はドニ……。

——ドニ……？

ドニ。マルチエロが生まれ育った町。屋敷を追い出されてからは、酒場にククルのツケを払いに行く他は、教会に業務連絡にたまに行つたくらいです。

「何故だろうか？ ドニが懐かしい……」

自分のふるさとはマイエラ修道院である、今のマルチエロを育ててくれたのはオディロ院長である……決してドニの生家ではない……そう自らに確認するマルチエロ。

——では、暗黒神の杖をとった私とは……。

マルチエロは頭を振ります。

——ククルを追い出したのは私だ。邪魔な勇者一行とニノを投獄したのも私だ……。

——私を育てたのがオディロ院長さまならば、今の私を見て何とおっしゃるか……。マルチエロの翡翠色の瞳がじわりとにじみます。「そんな子に育てた覚えはないと、

叱つて欲しい」と、子供じみた考えが頭に浮かびました。

普段のマルチェロなら、ふんと一笑して済ませてしまふところでしょう。しかし、今は涙が次々に流れていきます。

そしてマルチェロは魔物を倒すこともせず、走るようにしてある場所へ向かいました。もつとも、この時のマルチェロは、自分の行き先を意識していませんでした。

「……まさか？ いや、違うだろうね」

「全然違うだろう。おかみさんもボケたかい？」

無我夢中で走り、たどり着いたのはドニの酒場でした。

客たちは自分の噂をしているのだろうか……聞こえてくるそんな会話の中、マルチェロは案内された席につき、ミネラルウォーターを注文しました。

「……お坊様、目が見えないんですって？ 難儀なことだねえ」

労るように声をかけるのは酒場のおかみ。修道院時代だけでなく、ドニの生家にいた時からあれこれと気にかけてくれた人です。

マルチェロは名乗ることもできず、渡されたミネラルウォーターをただ黙って口にし
ました。

——私が私でないということが、かようにももどかしいと思つたことはない……。

もつとも、名乗ったところで、女神の試練により、私が私であるとはわからないようになってきているのだ。

時間も時間。客がどんどん増えていき、まだ何か話したい様子のおかみでしたが、マルチェロに背を向け、接客に走ります。

「しかし、似ていらつしやる」

「世の中には自分の他に3人そっくりな人間がいるというが……」

「……いやあ、嬉しいじゃないか。……おごらせて下さい！」

マルチェロの周りに何人か集まってきました。話の内容からして、マイエラ聖堂騎士団のようです。

——聞いたような声だが、誰だかわからぬ……。

目の見えないマルチェロは思いきって声をかけました。

「マイエラ修道院のかたですか？」

すると、集まっていた男どもは、「おうよ！」と言ってマルチェロを囲みました。

「いやあ、あなたは本当に我が騎士団長……院長に……」

「法皇さまだけ！」

法皇、と聞いてマルチェロの胸がチクチクと痛みます。

「……似ていると？」

「そつくりだ。その落ち着き、緑の瞳、マルチェロ団長に……」

酒場にいた騎士団員が更にぞろぞろと集まってきます。

来る者全てが口々に似ていると言うものですから、マルチェロは少しうんざりしてしまいました。

「ちよいと、騎士団のみなさん、もうおよしよ。マルチェロ坊っちゃんは……」

——マルチェロ坊っちゃん、か。おかみはいつまでも私を子供扱いだ。

薄く笑みを浮かべるマルチェロを、おかみは不思議そうに見ていました。

「いや女将……その、マルチェロはゴールド崩壊とともに行方不明になったと聞いているが」

マルチェロは、自分のことがどう話されているかに興味を覚え、そう尋ねました。

「ええ。マルチェロ坊っちゃん……院長さまは、法皇就任演説の途中、何者かと戦いになり、決着がつくかつかないかという時に、杖が生き物のように飛び出して女神像を砕いたと……像の中から暗黒神が生まれ、その衝撃でゴールドは落ちたそうです。演説に来ていたほとんどの人が、その大穴に落ちてしまい、助けることができません。マルチェロ坊っちゃんも、おそらく……」

おかみはしくしくと泣き出してしまいました。

「おかみさん、大丈夫だよ。マルチェロ団長は不死身なんだ」

「そうだよ。ゴルドの大穴に落ちたとしても、ただで這い上がっちゃこない。必ず戻ってらっしゃるさ」

騎士団員たちは樂觀的にみているのでしよう、マルチェロに酒を勧め、お祝いモード全開です。

マルチェロは勧められるまま2、3杯を口にし、あとは丁寧に断りました。

「就任式から戻った団員はいないというのか？」

「いないね。皆、マルチェロ団長と一緒にだ」

「みんなで戻って来るさ！ 団長なら大丈夫」

「おい、お前ら、団長じゃねえ、院長でもねえよ。法皇さまだ」

団長、院長、法皇……。自分の肩書きを並べられ、やはり「団長」と呼ばれるのが最もしっくりくる気がするマルチェロです。

「もし……、もし戻らな……」

もし戻らなかつたらどうするか、と聞こうとしたとき、おかみが水をこぼしました。

「あつ、なにしてたんだよ、おかみさん」

「大丈夫かよ、ほら、坊さんにもかかっちゃまってるぜ？」

「……すまないねえ、年のせいだよ。手がすべっちゃまった」

おかみは、マルチェロにかかった水分を拭き取ります。そして、マルチェロだけに聞

こえる小さな声で言いました。

「お坊様、それは禁句です。騎士団の人たちは、現実を見ようとしない。ゴールドで仲間が死んだなんて信じたくないんだ。もちろん、マルチェロ坊っちゃん……院長さまも。だから、戻らなかつたらなんて絶対に聞いちゃいけない」

「しかし、修道院は荒れてしまった……」

「お坊様、行ったのかい？　マイエラ修道院に」

「主不在の様相を呈していた」

おかみは、そりやそうだろうよ、と言つて新しいミネラルウォーターを手に持たせました。

「……みんな、マルチェロ坊っちゃんに頼りすぎた。坊っちゃんの参謀である団員も皆ゴールドに飲み込まれた。誰一人帰ってきてはいない。それから修道院は無法地帯さ」

「本当に、誰一人？　皆ゴールドに落ちたというのか？」

マルチェロはまさか、誰もということはないだろうと思いました。

——まさか……。

「……ああ。誰も。マルチェロ坊っちゃんも、ククール坊っちゃんにくつついていた小さい騎士団員も、人のよさそうなあの大柄の騎士団員も……」

「誰も……」

マルチェロは、いらないうおかみの言葉を制し、カウンターに代金を置いて酒場を後にしました。

——誰も……誰も？ 誰一人戻っていない……？

ふらふらした足取りでドニの町から出ます。

——私は何をしたのだ？ なぜゴールドが落ちたのだ？

見上げれば丸い月。

——なぜ、杖は女神像を貫いたのだ？

——なぜ、杖は法皇を殺せと言ったのだ？

——なぜ、私は杖を取ったのだ？

——なぜ！

混乱し、ふらふらと夜道を歩くマルチェロ。魔物は容赦なく襲ってきます。反撃しないマルチェロは、少しずつ体力が減り、膝をつきました。

——もう終わりか……。

その時、「もう止めて！」という声がこだまのように頭に響きました。勇者一行に攻められ、あと一撃で死ぬかというときの。

——あの時と同じか。あれは誰が言ったのか……クールだったか、赤毛の娘だったか……。バンダナの少年は、悲しそうな目をしていた……。

——意識が遠くなる……。私は何をしてしまったんだろう。私の一生とはなんだっただのか……。

魔物の数はどんどん増え、マルチエロを襲い続けます。

——ドニの生家を追われ、オデイロ院長に助けてもらい、マイエラ修道院で生きると決断し……。それなのに、修道院をあんなことにしてしまった。私の責任だ……。法皇になれば全てが手に入り、思い通りの統治ができると思ったのだ……。パルミドの治安維持も、サザンビークの財政難も、トロデーンの不可思議な呪いも……。統べることができる……。知りたかった、世界を。世界に私の力を及ぼしたかった……。

——それなのに、騎士団を失おうとしている。常に共にあった騎士団……。

——救わねば。今、私にできることはそれだけだ！

瀕死のマルチエロは、立ち上がり、渾身のグランドクロスを発動しました。

まばゆい光とともに魔法の力が魔物を攻撃。マルチエロの周りにいた魔物は一掃されました。

はあはあと息を切らすマルチエロ。魔物が散った跡にキメラの翼を見つけました。

それを手にしたマルチエロは、迷うことなくゴルドを念じました。

最後のお使い

「……はどこだ？」

キメラの翼を拾い、ゴールドへ飛んだはずのマルチェロ。

ゴールドの大穴に落ちた騎士団員を助け出すはずでした。ところが、当たりは闇。

「ゴールドの底なのか？ 誰かいないのか？」

闇の中を注意深く進むマルチェロ。

「返事をしてくれ！ 誰か！」

マルチェロは、就任式に來た騎士団員の名を呼びました。しかし、返事どころか、何の音もしません。マルチェロの声も、闇に吸収されます。

「……誰か……」

マルチェロはしばらくそこに立ち尽くし、膝を抱えて座り込みました。

「……オデイロ院長……」

うつ、うつ、と涙を堪える音。鼻をすする音。強く呼吸をする音。

——なぜだ？ 私はどうすればよかったのだ？ なぜゴールドに行けない？ 騎士団

員を助けてはいけないのか？

——私の騎士団！ 私の仲間！

——ククールよ、貴様の仲間は確かに立派な勇者だ。旅を続け、強く成長したのだろう。一朝一夕にその姿になったわけではなからう。それなりに様々な苦労があったのだらう。そんなお前たちに負けたことは認める。

——しかし、私にも仲間がいるのだ。私が育てた大切な騎士団員が。あいつらは私を待っている。私を必要としているのだ！

——女神よ、仲間を助けてほしいのだ！

——応えてくれ！

「マルチエロよ……」

——女神か？

どれくらいの時が経っていたのでしょうか。または、時間が止まっているのでしょうか。マルチエロを包む空間に、女神の声が響きました。

「女神か？ 仲間を、騎士団員を助けてほしいのだ。ゴールドへ行きたいのだ。ここから出してくれ！」

「お前は使命を忘れたのですか？」

「しかし、女神よ！」

「我が秘宝を届ける使命を果たしてはいないではありませんか」

「しかし、騎士団が！」

「お前は何もわかっていない。お前は全て失ったのです。お前に残されたのはその生命だけ。仲間もない」

——全て、失った……。

「騎士団……全て……」

「そう。お前が大切にしたものはお前自身だけだった。仲間を忘れ、感謝を忘れ。だから、勇者に負けた」

「一人だった。勇者と戦う間ずっと……」

マルチェロは思い出しました。ゴルドの演説の場。宙を飛べる者だけがたどり着けるあの場所。自ら選んだあの場所。勇者は不思議な力で飛んできた。自分だけが飛べると思っていたのに……。

「……私は暗黒神の力で飛んだ。勇者は女神の力を得たというのか？」

「いいえ。違います。彼らは、暗黒神をおそれる力を以て飛んだ。暗黒神を倒すために与えられた力」

「そんな力があるならば、さっさと暗黒神を倒せばよい！ なぜぐずぐずと徘徊しているのだ？」

「徘徊か……お前の考えをよく表している言葉ですね。勇者たちはまだ力が及ばないと自覚し、更に力をためているのでしよう。それに、飛ぶ能力があるからといって、暗黒神を倒す力も得られたわけではない。我が秘宝を届けよ、と言ったのは、彼らにとつて秘宝が最後の砦となるからです。暗黒神に対峙するには秘宝の力が必要なのです」

「なぜ、秘宝を直接勇者に渡さぬのか？」

「秘宝のままでは役にたたない。7つ全て集まった時、暗黒神の殻を破る神の力となるであろう」

「なるであろう？ 確実ではないのか？」

「マルチエロよ、お前では賢者の力が結集した更なる力を操ることはできない」

「！」

「……お前は他を頼らない。自身の力があることは認めよう。しかし、他を頼らないということは、他の力を信じていないということでもある」

「私は……私には信頼できる部下がいる。その部下をゴルドの大穴から助けたいのだ」

「違う。お前の信頼とは、お前に忠実だ、と認めた部下だ。お前が今、最も信頼しているのはレオパルドだ」

「レオパルド……。レオには感謝している。私を本当に助けてくれる。その身をもつて。レオ……。レオ、すまない……。私は、自分のことしか考えていなかった。レオは今、

この瞬間も私を信じてくれているだろうか……」

マルチェロは道しるべとなってくれるレオパルドを思いました。いつも不安で悲しそうなドルマゲスのことも……。

「お前の行き先はわかりますね？」

「はい。女神よ……」

「では行くがよい。お前に更なる試練を与えます。この私の使命を果たすまで、盲目でいなさい。いいですね、月が出ていても何も見えませんよ」

マルチェロは、レオパルドとドルマゲスのことを念じました。

——どうか、二人のいるところへ……。

「マルの旦那あ！」

「兄さん！」

マルチェロが念じた通り、レオパルドとドルマゲスのところに着地しました。

「どこ行つてたんです？ 心配しましたぜ？ 俺は腹が減つて腹が減つて……」

「ドルマゲス！ てめえ、どこまで食い意地張つてるんだ！ ガウツ！」

久しぶりの二人のじゃれあいを懐かしく思うマルチェロです。

「待たせたな、二人とも。さあ、参ろう。……女神の思し召しによつて月光のもとでも見

えなくなつた。レオ、ドルマゲス、案内を頼む」

「そんな、ひどい！」

「まったくですよ兄さん！ 女神はなぜそこまでの試練を……」

女神の仕打ちにドルマゲスもレオパルドもぶつくさ文句をたれます。女神が聞いたらいかずちが落とされそうな放送禁止用語がぼんぼん飛び出しています。

マルチエロは苦笑いしながらも、そんな二人に導かれてサヴェツラ大聖堂への階段をゆつくりと登りました。

法皇の館への昇降盤では、宙に浮いたような感覚に、レオパルドが身をすくめます。ドルマゲスは子供のようににはしやぎました。

爽やかな薔薇の香り。

薔薇のアーチを抜ければ法皇の館です。

——私はこんな高みに居座りたいと思つたのか……。

ドルマゲスは初めて見る法皇の館に、スゲースゲーと連呼します。

レオパルドは盲導犬として館に入ることを許されました。マルチエロは、一緒にいられることを嬉しく思いました。

「兄さん、兄さんの番ですね。最初で最後の……」

「そうだな」

ドルマゲスが屋敷の扉を押します。一步踏み入れると、マルチェロは少し胸が苦しくなりました。

「……レオ、私の胸は張り裂けそうだ。だが、正直なところ、もつと動揺するかと思っていた。不思議なことに、どこか満足しているところがある」

「何か、わかつたんですか？」

「いや、まだだ」

ゆつくりと階段を昇ります。

一步一步。

「こちらには前法皇さまのご遺体を安置しています。どなたでも自由にお別れをすることができます……」

警備の騎士団員が、参拝客が来るたびに、抑揚のない文言を繰り返していました。マルチェロたちにも同じ言葉を言います。

「旦那、棺の前にきました」

ドルマゲスがそう言うのと、レオパルドが鼻を使ってマルチェロの手を棺に触れさせました。

「お……」

マルチェロの胸に、津波のように押し寄せる後悔の念。

取り返しのつかないことへの懺悔。

震える声で詩編をつむぎ、最後の秘宝を捧げました。

——私は、何が欲しかったのだろうか？ 地位か、名誉か、仲間か……？

マルチエロ、ドルマゲス、レオパルドの姿は誰に気づかれることなく、その場から徐々に消失していききました。

エピローグ・ゴルドの洞門

コツ……コツ……コツ……。

ザツ……ザツ……ザツ……。

コン……コン……コン……。

ザクツ……ザクツ……ザクツ……。

ゴルドの地下、闇の中で小さな音が聞こえます。

絶えることのない音。

誰かが何かをしています。

彼を包むのはかなり傷んだ衣。法衣でしょうか。元は鮮やかな青をしていたかと思われず。

肩に近い黒髪は乱れ、絡み合っていていくつかの毛束を作っています。

手には小さなノミ。

彼はこのノミで目の前の岩肌をただひたすら掘り続けているのです。

彼の外の世界では、彼の帰還を待つ者が大勢いました。

ゴルドが落ち、未だ帰らぬ身内を待つ者たち。

彼を長と仰ぐ、聖堂騎士団員。

ゴルド崩壊の罪は彼にあるとする教会関係者たち。

彼の命のあることだけを切に祈る者……。

その彼は、ゴルドの底に自ら飛び込んだのです。

女神は彼に話しかけました。

「お前の命はまだ人間の世界にあります。しかし、ここゴルドの底は人間の世界でもなく神の世界でもない。ここでの時は止まっています。何故、自らここへ来たのですか？

……ゴルドに落ちた者たちを救いたいと？ ……一人残らず、というのですか。

……いいでしょう。では、このゴルドの底に洞門を掘りなさい。外海へ通ずる道を作るのです。……このノミを与えましょう」

そうして与えられた小さなノミひとつ。

彼は、無言で掘り続けます。

たった一人で。

外の世界では、勇者が暗黒の神を破り、ようやく平和がおとずれようかというところ。

彼は無心で洞門を掘り進めます。
永遠ともとれる時間の中で。

ガツ！

手応えが、向こう側に抜けたとき、まばゆい光とともに、強い塩の香りが入ってきました。
した。

彼は小さなノミを固く握りしめたまま、吹き込んできた風にその身をさらしました。

ああ、終わったんですね。

そのノミを捨ててしまいなさい。

しかし彼の右手はノミを固く固く握りしめたまま。

やつと開いた瞳は、まるで翡翠。立ち尽くす彼の前に果てしなく広がる大海原の輝きと遜色ありません。

やがて彼の背後からざわざわと声が聞こえてきました。

いつの間にか船が来ていて、体格のよい船長が人々を船に乗せはじめました。

小さな船でしたが、いくらでも人が乗り込めます。

人々は「あの人が掘った」「あの人のおかげで助かった」と話しています。

最後の一人が船の前に立ち、言いました。

「あの人がいません」

「あの人？」

船長がいました。

彼はすぐ側にいるというのに、誰にも見えないのです。

「はい。あの人……」

名前が思い出せないのですね。あの人とは、彼のことでしょうか？

「もう船に乗ったんだらう？」

船長はもやい繩を手繰り寄せます。最後の一人は、未練の残る表情を、彼のほうへむけました。しかし、その瞳に彼が映ることはありません。

「そうでしょうか……」

「もう誰もいない。出航だ」

彼はとうとう置き去りにされてしまいました。

船はあつという間に遠ざかっていきます。

しかし彼は、船を追うことも、待てと言うこともなく、ただ静かに見送っていました。

明くる日も、また明くる日も、彼はノミを握りしめたまま、海を見ていました。

ある日のことでした。

「外へ出たいか？」

女神が彼に話しかけました。

彼は、翡翠の瞳を大きく見開きました。

それを肯定だと受け取った女神は、彼を砂漠の枯れはてた井戸の底に運びました。

* * * * *

「まさか、こんなところにいねえよな……」

長い銀髪の男が、まるで導かれたかのように井戸へ入ってきました。

「！」

井戸の底、壁にもたれる彼がいました。

「おいー！」

銀髪の男は、彼に駆け寄ります。痩せ細った肩を揺すり、おい起きろと繰り返します。しかし、彼のあの翡翠の瞳は開きません。

「どういっつた？」

銀髪の男は、彼を担ぎ上げようと、背に手を差し入れ、自分の肩にのせようとした。ところが、根が生えたか糊でくっついたか、彼の身体は少しも動きません。

男は渾身の力を込めます。しかし、駄目です。

「兄貴よお……」

銀髪の男はそのサファイア色の瞳からはらはらと涙を流し、彼の身体を抱きしめました。

彼の髪を撫で、ほおずりし、豆だらけになった右の手のひらを労るように撫でました。「あんたが洞門を掘ったんだろ？ 誰もあんたを処刑しようなんて思っちゃいない。ゴルドに落ちた奴はみんな帰ってきたんだ……大丈夫だ、もう……終わったんだよ」

反応のない右手を自分の頬にあて、男は泣きながら続けます。

「会いたかった、兄貴。俺の兄貴……」

男は片手で手を握ったまま、もう片方の手で彼の顔を撫で、口づけをしました。

乾いた唇。砂で汚れ、固い岩のようでした。

銀髪の男はしばらく唇を重ねていましたが、彼の体温を感じた気がしてそつと唇を離しました。

すると、翡翠の瞳がゆっくりと現れました。

「あ！ 兄貴！ 良かった！ 気がついたか！ ……ああ、よかった！ 俺の兄貴！ 無事だった、生きてた！」

銀髪の男はガバツと彼を抱きしめ、兄貴兄貴と繰り返し、先ほどよりも大粒の涙をポロポロとこぼしました。

「貴様、何故ここにいる？」

「えっ？」

彼はすつくと立ち上がり、男を見下ろしました。男は、突然のことに驚いて、しりもちをついたまま、ぼんやりと彼を見上げます。

「何故ここへ来たのか聞いているのだ」

彼の瞳は、レイピアの切っ先のように鋭く男を射抜きます。

「あ、兄貴？ ……オレ、暗黒神を倒したあと……まあなんだかんだ色々あつてさ、そんなんだかんだが終わったから、あんたを探す旅に出ていたんだ。そしたらゴルドに洞門が開いたつて聞いて、帰還者の中にあんたがいかい探したんだが、いなかった。誰もあんたを見てないつて言うし。でも、騎士団の一人が『この洞門を掘った人かも知れませんか』て言ったんだ。その人は、休むことなく掘り続けていたが、誰もその姿を見ていないつて言う。……オレはピンときた。掘ったのは兄貴だつて。そしたら、その

晩、夢に女神さまの声が聞こえてきて、『深い場所にいます』って曖昧なヒントくれてさ。それから世界中の井戸を探しまくった。……寒いオークニスに行く前にあつまっておこうと、砂漠に来てよかったぜ……」

「何故、私を探していたのだ？」

彼の問いに、銀髪の男はゲラゲラと笑い出しました。

「何言ってるんだよ……オレの兄貴だからに決まってるだろう！」

銀髪の男は立ち上がり、改めて彼を抱きしめました。

鼻をくすぐる清潔な石鹸の匂い。彼は、自分が長い間風呂に入っていないことを思い出し、男を思い切り突き飛ばしました。

「つてえ！ 何すんだよ？」

自分を真つ直ぐに見つめるサファイアの瞳。

「……あれから……暗黒神が倒れてから何日経った？ 私は……」

「うん、まあ……長かった……」

「……臭いはずだ」

「は？」

「ずっと身を清めていない」

「兄貴？ ……臭いって……。そんなことオレ、気にしないぜ？ あ、でも兄貴はネコ並

みにきれいな好きだからな。よし、行こう！ パルミドへ！」

銀髪の男……彼の弟は兄をしつかり抱え、移動呪文と唱えました。

訪れたのは、湯気の出ているあの場所です。

「ククールさま、いくら貴方でも、それは困ります……」

サウナの責任者が丁寧にお断りしました。

「だから駄目だと言ったろう？」

「まったく、情けない奴らだけ。ちょっと兄貴が臭いからって……。よし、あそこなら……

ベルガラツク！」

「えーっ！ ククールったら、なにそれ？ 駄目駄目駄目！ 他のお客さんが帰っちゃ

うよー！」

若い支配人が鼻をつまみながらあわててお断りします。

「んだと？ ユツケのくせに生意気な！」

「だから……」

「じゃあしようがねえ、次だ。オークニス！」

「ククールか？ やめてくれ。オークニスは防寒のために、直接外気が入らないように

なっている。換気を強くしても、それは……」

円形の作りになっているオークニスの町で、薬師のグラッドが鋭い眼差しを向けてお断りしました。

「てやんでい！ グラッドの唐変木め！」

「グラッドでなくとも断るだろう。だから……」

「ああ、もう……あそこだ、あそこ！ 不思議な泉！」

「なんだここは？」

「あれ？ ここは不思議な泉だよなあ……」

「おや、その声は勇者の一人……ん？ 泉に用が？ ああ、呪いが消えたと同時に、不思議な力も消えたようじゃ。そのあとサザンビークの名勝100選に入ったのじゃ。気安く泉の水に触れるでないぞ……」

森の中、美しい泉の近くにいた賢者が、それはそれは優しくお断りしました。

「もういい！ リーザス！」

「……臭え！ リーザス警備隊、臭いの元を絶つ！」

リーザス村の治安を守っているちびっこ警備隊は、話も聞かず襲ってきました。

「わーっ！ バカ止めろ！ パチンコ玉だな？ 飛び道具使いやがって！ しやーない、トラペッタ！」

「あれ？ 門が開かねえぞ？」

「ピピピ……センサー感知しました。人でも魔物でもない臭い……人体に与える影響は半径1メートル以内300マイクロシールド……ピピピ……除去します。ピピピ……除去装置起動……目標……距離30非常に近い……ピピピ……発射……」

トラペッタの門が、異物除去のレーザービームを発射しました。

「わーっ！ あぶねえ！ なんだこりゃ？ クソ田舎のくせに……じゃあ、次は……ええと……城はまずいし……」

「もいい」

「大丈夫だ、兄貴、安心してくれ、オレがついてる」

銀髪の弟は、トラペッタの西、広場に腰をおろし考えました。

——リブルアーチにまだ行ってねえが、あそこは教会の力が強いし……ヤンガスがいるだろうからいつそゲルダ姐さんのところへ行くか……アスカンタのキラちゃんちもいいな……いや、あそこは城に近いし……。

「クールよ、もいい」

「よくねえよー！」

弟の熱い眼差しに、彼は少し怯みました。

「……………よくねえよ……………」

風が銀髪をすきます。

「美しい髪だ……………」

彼は弟の髪に手をやりました。

「帰ろう。マイエラに。川で身を清める。……………騎士団時代のように……………」

「兄貴……………」

二人はマイエラに飛び、川で身を清めた後、ドニの宿屋で身を落ち着かせました。

暗黒神復活、ゴルド崩壊の罪を問われ、彼の行方を探す勢力があることを、弟ククルは知っています。

でも、今は、たった二人のきょうだいの再会を喜び、疲れはてた彼を休ませてあげましょう……………。

この後のことは、また別のお話……………。